

# 想創奏

**20 周年記念特別号**

2021 年 10 月 1 日発行

就職復帰まであと1ヵ月半日ですが  
10月中旬になったら一生懸命お仕事をこなさ  
これから自分続きます  
一方 僕の1人暮らしはあと2年立ったら20年目  
になるところです

社会福祉法人そうそうの杜

## 機関誌の発行に向けて

理事長 荒川 輝男

法人設立 20 周年＋無認可作業所時代 7 年の歴史を刻むことができた。法人を設立するときは、大阪の障害者福祉を、さらには日本の障害者福祉を変革するという志を掲げ、新たな福祉を創造すると真剣に考え、法人をスタートさせ運営してきた。

この 20 年間を振り返ってみると、そんな大きな仕事はできなかったが城東区に腰を据えて、ある程度の役割を担うことができたのではないかという自負心がある。

この間、様々な出会いがあり別れがあった。法人運営上危機的な状況も繰り返されてきたが、その都度、何とかなるさの精神で嫌なことは 3 日もすれば忘れて、前を向くように心がけてきた。その結果楽しいことの思い出が多くよみがえってくる。

特にスタッフ集団には無理難題を吹っ掛けながら、我々は福祉を目指しているのであってサービスを提供しているつもりはないと叱咤激励してきた経過があり、ここに至るまでにはスタッフに対しては平易な言葉では言い表せないほど感謝の意を伝えなければならない。

・・・ひとりひとりに、ありがとう・・・

利用の皆さんに対しては

・・・ありがとう・・・

・・・ひとりひとりの笑顔にありがとう・・・

城東区に必要な資源を必要に応じて創り、弾力的に運営して、元々はお金がないのを売りにして賃貸物件を借りていつも身軽な形で運営してきたが、ある時期から欲目が出てきて土地を取得し、建物を保有することになり、現在に至るまでに固定資産も徐々に増えてきた。

それと共に、意識の中で守りに入らないように、今までのありようをスクラップ (scrap) して新たにビルド (build) することをモットーにここまでくることができたし今後もこの精神で新たな時代の新たな福祉を目指していきたい。

この機関誌にたくさんの方々の言葉をいただきましたのですが、紙面の都合上全員にはお願いできませんでした。申し訳ありませんでした。





## 【利用者編】

### 今福事業所 藤田 往子さん

6年前に奈良から大阪に出て来ました。当時おばあちゃんが通っているデイサービスの担当の方に荒川さんを紹介してもらい、そうそうの杜を利用することになりました。

今福事業所のスタッフの竹森さんに出会えたことが嬉しく、いつも楽しく作業をし

ています。作業はカバンのタグ付け、ネジの検品等をしています。一番の思い出は就労旅行でマリンワールドに行ったことです。コロナ禍で楽しむことが出来なかったので、“そうそうの杜祭り”がしたいです。

### 今福事業所 井上 幸一さん

喜連瓜破の職リハで仕事探しながら作業をしていたら、実習先で藤田照子さんとの出会い、いろんな情報を提供してもらったことがきっかけで、そうそうの杜を利用することになった。

(株)杉本商事に就職できたこと、7年ちよっと仕事ができただことは嬉しかった。最

近はパソコン検定5級に挑戦して合格したことも嬉しかったです。仕事を辞めてから就職ができてないからしんどいです。一人暮らしをしているから、家賃や光熱費などお金がかかり、工賃だけでは賄えないから早く就職がしたいです。

### 今福事業所 千北 一宏さん

利用のきっかけ・・・平成9年度2月中旬相談員からそうそうの杜を紹介してもらった。24歳のころ一生懸命働く事が楽しかった。手作業仕事をしています。今年の10月に

就職を目指したいです。

**\*平成15年1月にそうそうの杜の自立生活第1号として中浜に住まいを初めて20年近くになります。**

創奏 後藤 育郎さん

一番の思い出は？

昔、夏の旅行で”きもだめし”をして楽しかったし、怖かったことかな。

運動会の綱引きも楽しかったなー。

創奏 佐竹 知子さん

一番の思い出は？

運動会でリレー選手で走ったこと。

創奏 白橋 健太郎さん

一番の思い出は？

そうそうにきてたのしかったのはみずぐち

さんとあそんだことですがとてもたのしかったです。

今福事業所 田頭 慶三さん

たのしかったこと

よかったこと

しんどかったこと

最近は、そうそうの杜に、お昼ごはん、おかずは、すき嫌い、よく、のこします。

かぼちゃ、ナスビは、嫌い、と思います。

夏の旅行、滋賀県の時に、ヤキ肉を、食べました。

バーベキューの、事でした。

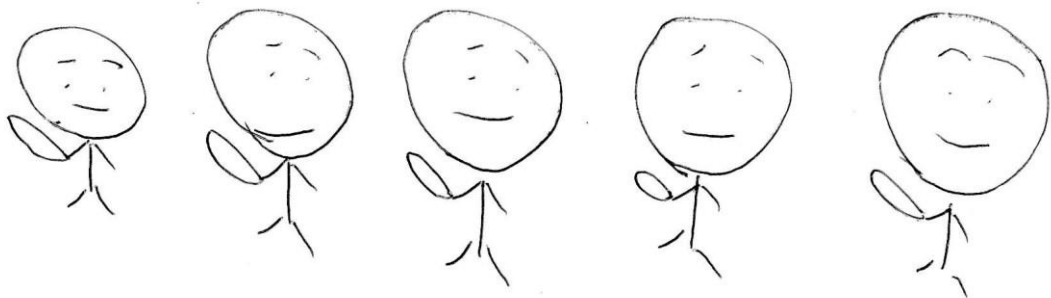
たまねぎ、ウインナー、イカ、シイタケ、

バーベキューの、時は、ごはん、三回も、おかわりも、しました。

ヤキ肉の、時は、好き、嫌い、ナスビは、食べる、事は、できません。

去年の時は、大阪市城東小学校、運動会、僕たちは、青チーム、負けました。

大阪市立城東小学校、運動会、休けいの、時間は、とりのからあげ弁当を、食べました。とっても、おいしいかった。



そうそうの杜の思い出  
つむぎ館 池田 ひとみさん

そうそうの杜に来て、どれくらいになるかは分からないし、どうやって来たのか覚えていない。来た時は「そうそうの杜」に居るということもわからなかったから、周りの人には、前の事業所の名前を言ったこともあった。

昔、何人かでお祭りに行ったら迷子になった。気の良いおっちゃんかお巡りさんが、何処から来たのかと聞いてくれて、連れって行ってくれた。まだ、私は道も覚えていなかった。「そうそうの杜です」と前の創奏（蒲生）の場所を言うと、一緒に探してくれた。おっちゃんに「ここで合ってる？」「他の人

の家じゃないの？」と聞かれた。私たちは「ここです。合ってます」と言ったけど「一軒家やん」と言われた。そうそうの杜が、まだ小さい時で誰も知らなかった。今は、そうそうの杜と荒川さんの名前を言うと、皆知ってくれている。昔と同じように迷子になっても「あー、そうそうの杜か」「ここしかないだろう」って言ってくれると思う。私は、もう迷子にはならないし、道も覚えている。懐かしいなあ、あの時は楽しかったなあと思う。私は、60歳までは仕事をしたい。これからもよろしくお願いします。おわり。

げんげん 糸永 多恵子さん（おかあさんより）

Q そうそうの杜の利用のきっかけは？

A 養護学校（現支援学校）の高等部に在学中、進路指導の先生といろいろな所を見学させていただき、障害の重い軽い、種類を全く問わない創奏の代表者のおおらかな考え方に、

ここなら・・・と思い決めました。

Q 印象に残るエピソードは？

A 令和2年にMV P賞の表彰状をいただいたこと。

よく見えるところに、今も飾っています。

Q 今までで大変だった思い出は？

A 検査、治療。幸いにも大きな病気とはなく今に至りますが、虫歯の治療が大変でした。

全身麻酔で行いますので、その前の検査（レントゲン 心電図 血液採取）。

とにかくこれからも、検査、治療に関しては、大変だと思います。

Q 今後そうそうの杜に、こうしてやって欲しいことは？

A 病院、医師との連携。何かあった時に、すぐに関わることができるように、おつき合いを密にしたい。

Q 利用当初と現在で、変わったと感じることは？

A 団体生活をしていると、毎日がサバイバル？たくましくなってきました。

意志表示がはっきりしてきたように思います。（本人）

所帯、規模、全体的に大きくなったなあ

と思います。(法人)

Q その他、自由に記述してください。

A 20年以上利用させていただきありがとうございます。今までより、これからの

人生の方が何かと大変なことが多いかと思っています。

親の勉強が全く足りていないので、ご指導よろしくお願いします。

## そうそうの杜 20 周年

つむぎ館 西村 紀代子さん

仕事を辞めて、色々あって、そうそうの杜を見学しました。創奏を利用するようになりました。そうそうの杜に来て、相差に海水浴に行きました。穴喰のペンションに行きました。京丹後の旅館にも行きました。温泉旅行にも毎年参加しました。色んな人に行き、思い出づくりをしました。しんどくて、どこにも行けないこともあったから、旅行に行けたことは夢のようでした。何歳まで

体力がもつか、心配ですが、色んなことに参加していきたいです。

20 年は、色んな人との出会いがあって、別れもありました。長い年月と思います。「そうそうの杜は、誰が利用者か、誰がスタッフか、わからないところがいいところ」と言っていた人がいました。そのとおりで、皆しっかりしていて面白いなと思いました。皆と仲良く、末永くいきたいです。

げんげん 希 河野 稔さん (おかあさんより聞き取り)

Q そうそうの杜の利用のきっかけは？

A 光陽養護学校(当時の名称)卒業後、稔は重度で行く所はあるのだろうか心配していたところ、まだ出来て間なし「そうそうの杜」を紹介してもらい決めました。

なった時、初めて長い間他所で泊まる事になり、とてもとても不安でしたが、皆様にお世話になり本当に良くしてもらい助かったことです。

あとで1日の稔の記録を読み返し涙が出てきたことです。有難うございました。

Q 印象に残るエピソードは？

A 数年前退職されたスタッフさんから、「稔さんはいつもニコニコして癒しでした。散歩の時は話を聞いてもらっていました。」と言って頂いたことです。

Q 今後そうそうの杜に、こうしていつて欲しいことは？

A 今、稔は、今年の2月より下宿屋「希(まれ)」でお世話になっております。土日は家に帰ってきて本人の顔も見れるので、私がいつまでも元気でいて、今の状態が続くといいなと思っています。

Q 今までで大変だった思い出は？

A 平成30年10月、私に変形性膝関節症で手術をした時、稔を40日間ほど「そうそうの杜」のショートステイでお世話に

連絡を密にしてもらい、稔が「希」に慣れて、楽しく暮らして欲しいことです。

Q 利用当初と現在で、変わったと  
感じることは？

A 多くの人に関わってもらい、出来る  
事が増えた事。

一人では出来ないことが多いので、誰に  
でも手伝ってもらえる事。

当初一泊旅行（今はコロナ禍で行けませ  
んが）は、夜は寝なかつたりとか、旅館の  
料理を食べなかつたりで、皆さんにも迷  
惑をかけるので行ってませんでした、  
それが行く様になったこと。

### つむぎ館 辻 直樹さん

そうそうの杜に来て色んな仕事をしまし  
た。昔、つむぎ館が開業にあって時には、箱  
分けや消しゴム並べと色々と仕事をしまし  
た。蒲生、嶋野と引越しています。嶋野は

慣れました。運動会の大玉転がし、湖水浴は  
楽しかったです。これからもおもしろくし  
たいです。

### 辻 八 重子さん（辻 直樹さんのおかあさん）より

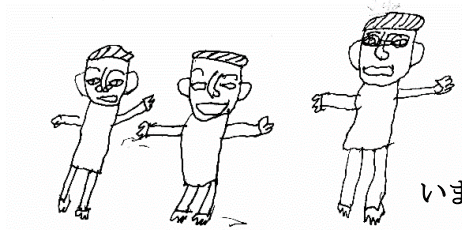
そうそうの杜、20 周年お祝い申し上げま  
す。

理事長は、毎日が大変な日々だったと思  
います。スタッフさん方も同じく、お疲れの  
日々だったでしょうね。

直樹がお世話になっています「つむぎ館」。  
仕事を教えていただきながら楽しそうに、  
そしてつむぎ館の仲間の方々にも色々とお  
声がけをしていただいていたいました。時々見  
学に行った時に、利用者の皆さんが私に「お  
ばちゃん」と声を掛けていただき嬉しく  
想って見学させていただきました。直樹も

仕事をこなしていました。今の所へ引っ越  
し、心配でした。帰って来て話をしてくれま  
す。どんな仕事をしたか、昼食は何を食べた  
か話してくれます。彼なりに頑張っている  
のがよく分かります。もっと書くことが山  
ほどありますが、母として見守っていこう  
と想っています。理事長、スタッフの皆さん、  
これからもよろしくお願い申し上げます。

\*希…地域生活サポート事業（法人独自の公益事業）



いま福の家 奥山 修子さん

20 周年おめでとうございます。利用のき  
っかけは城東区役所の方からの紹介です。最

初は創奏 1 件でした。色々作業所に行き  
今はいま福の家にあります。

これまででいい思い出はやはり年 2 回の夏冬の旅行です。浮き輪でプカプカ楽しかったです。逆に大変だった事は外出していて地下鉄の線を間違え京橋で熱中症になり倒れ救急車で運ばれ、歩いてはいけないと

オムツをされた事です。今後もこのままで過ごしていきたいです。いま福の家は楽しいスタッフの方が良くしてくださるのでありがたいです。これからも宜しくお願いします。

### げんげん 田村 隼人さん（おかあさんより）

Q そうそうの杜の利用のきっかけは？

A 利用されていた先輩に話を聞き、通所する事を決めた。

Q 印象に残るエピソードは？

A 退院後、自宅療養の為、暫く通所を控えた時の年末、表彰してもらった事。

Q 今までで大変だった思い出は？

A 今現在、その時で、過去の大変さは記憶から消え果ててしまいました。

Q 利用当初と現在で、変わったと感ずることは？

A 健康面は幸いにして、今のところ問題はないけれど、身体の衰えを痛感している。

Q その他、自由に記述してください。

A ・この仕事に携わってくださっている職員の方々に感謝しております。

・毎日の通所は本人の活力にもなっていますし、家族の生活が支えられていると感じております。

・生意気で失礼ですが、人手の確保が大変な時代ではありますが、確かな理念を持った若い世代の方を育てていてもらいたい。そう願ってます。

### 20 周年

#### いま福の家 高木 庸子さん

そうそうの杜に来て 4 年目になります。8 月で 76 歳になりました。まさかこの町で暮らそうとは思いませんでした。恩師と出会うたびに Kawasemi でひと時を過ごすのが楽しみでした。町のあちこちに作業所があり利用者が住む広い範囲をスタッフやヘルパーさん達が自転車でサポートに回られている大変さを知り、これがそうそうの杜が目指されている地域社会との共存であることを知りました。

私は視覚障害の盲老人ホームに入居していたのですが、ホームの方針がだんだん変わる中、自分でありたいと思っている私にはこれ以上は無理と思い、恩師に相談し荒川先生にお願いしました。先生は私が何をしたいか、どうしたいかが決まったら協力すると言ってもらったその言葉は今も迷った時の私の羅針盤です。

役所やホームに変わりたいことを告げたのですが、なかなか許可がおりませんでした。



た。その理由の一つとして年だからとホームに入った人に許可を出して何かがあれば責任を問われると言われるのです。一度決まると後戻りをさせてもらえないのか、話をすればするほど唇寒しのむなしさが残ります。

このことはいろんな時に感じます。でも荒川先生はじめ私の知らない人たちの協力がありそうそうの杜の住人になれたのです。

### Kawasemi→杜の Shokudo 大沼 健一郎さん

法人化20周年おめでとうございます。  
私自身がそうそうの杜と関わりだしてから数えても足かけ9年、色々な事がありました。

本当に1番最初の接点は【発達障害のある方の就労支援】の様な内容のシンポジウムだったと記憶しています。  
当事者による当事者支援、ピアとして就職できる法人を探していた時期でしたが、その中でそうそうの杜の理事であった方が話された、地域生活の基盤としての就労場所、という考えにとっても感銘を受けました。すぐにホームページを探し、少し迷いましたが電話を入れ、非常勤ヘルパーとしての職がないかと訪ねました。

以前は建物や機械管理の仕事などをしていましたが「常になんとか生きづらい」と感じていたのです。もちろん気付いていなかった不注意性等の障害特性の為です。

生活も乱れ、金銭管理もできない程に消耗してしまい、賃貸マンションも何もかも全てを投げ出し一月ほどホームレス生活を送りました。

橋の下で眠る日々の中、あまりの空腹に

感謝あるのみです。

今もサポートしてもらっての日々ですがこれからはもっとサポートが必要になるのは現実となりますが、私は何の心配もありません。

そうそうの杜でゴールと思っているのでその時までお付き合いをお願いします。

私は「これはホンマに死ぬな……」と思い、役所窓口のホームレス支援にたどり着いたのです。たまたま前職の上司にアスペルガーの疑いを指摘されていたので、その際に診断を受けられる病院も探しました。病院で診察を受け診断を頂き、ようやく合点がいきました。自分に合わない生き方をし続けていた事に気づき、だからこそ生きづらかったと腑に落ちたのでした。

生活保護の力を借りながらではありましたが、元々福祉の職にも興味があったので、当事者向けのヘルパー講座を受け資格を取得してすぐのタイミングで、そのシンポジウムに参加した訳です。

入職してすぐはガイドヘルパーとして勤務しましたが、この頃そうそうの杜でも大きな動きがありました。大阪でもかなり最初期の就労支援A型施設である発酵薬膳kawasemiが立ち上がる時期だったのです。

kawasemiでも働く流れになり、新たにA型利用の契約を結び、ホール仕事から始まり、料理の基本を覚え家でも独習しながら、ヘルパー業務としては食事作りも入るようになり、生活保護も脱却できました。またプ

ライブートでは、このタイミングで結婚することもできました。

その後調理師免許を取得してヘルパー業務を卒業して kawasemi 専業になるのですが、その時期でもまだまだ自己肯定感が低く、運営方法などの些細な違和感にも敏感に怒りまくっていて、火がついたら手がつけられないと言われていました。

その後段々と温厚になり、平成最後の年末には穏やかになったと理事長表彰まで頂きましたが、その三日後のお節作りの場面で大激怒して表彰を台無しにしてしまったという思い出もありました。

ともあれ、ホームレスだった私が生活保護も抜け出し、ローンとはいえ一戸建てまで購入出来たのは、そうそうの杜との出会いがあったからだと感謝しています。

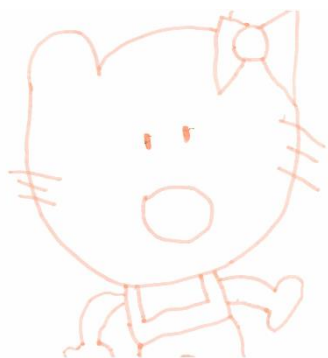
長く私の思い出話になってしまいました。が、こんな私でもここまで居心地よく続け

てこられたのは、そうそうの杜が当事者ファーストを崩していないからだと感じています。それは日々が荒れなければ良いと言うような甘い話ではありません。人間同士としてぶつかってでも本人の幸せになる方向に働きかける、という性質のものです。

たまに当事者向けのローカルルールが強くなりすぎて、スタッフ同士の感覚も世間一般的な常識から逸脱しすぎるという謎の問題も発生しますが、それでも当事者の幸せの為に、お題目ではないというのが素晴らしいと感じています。

最後に、法人化以前からも含め 26 年も続けて来ている、当事者利益を最優先する姿勢を続け、さらにさらに法人が発展されることを切に願って、これを法人化 20 周年のお祝いとさせていただきます。

長月吉日



そうそうの杜 20 周年おめでとうございます。

庵 石川 綾子さん（おかあさんより）

そうそうの杜と出会ったきっかけは、友人にこんな生活介護の事業所があると紹介してもらい、自宅から近かったこともあって利用する事になりました。

綾子はお風呂が大好きなので、入浴をするとニコニコと笑顔で帰ってきています。水分補給は哺乳瓶に飲み物を入れて持って行きますが、本人の気分によって夏の暑い日でもあまり飲まずに帰ってくることもあ

るので、家に帰ってからスプーンで飲んでもらうのが日課になっており、少し大変です。

綾子は音楽が好きで、音楽が流れていると声を出して歌にのって笑ったりします。近くで音楽を流す機会を作っていただけると嬉しいです。

これからも宜しくお願いします。

## 庵 飯田 志津江さん

初めに 20 周年おめでとうございます。そうそうの杜との付き合いも長くなり楽しく毎日すごしています。ここに来たきっかけは荒川さんと出会ったことでした。私の外に出たい気持ちと、母の家で見守って行きたいとの言葉に揺れていましたが、まわりの応援もあってお世話になる決心をしました。

慣れない電車の乗り降りや、エスカレー

ターに乗ったり信頼できるヘルパーさんとの出会いや成長できたことを一緒に喜んでくれる人が周りにいることがとっても幸せです。

今はコロナで外出もなかなかできないけど、コロナが落ち着いたらコンサートや旅行に行ったりみんなと寿司を食べに行ったりワイワイしたいです。これからもよろしゅう！お願いします。

## 庵 福本良成さん（おかあさんより）

そうそうの杜二十周年おめでとうございます。

僕は中学の頃からそうその杜のお世話になって十五年です。家族は大好きなお父さん、僕にだけ優しいお兄ちゃん、よくお世話をしてくれるお姉ちゃん、子離れが難しいお母さんです。今は兄妹は独立して家には居ませんが、姉が近くに住んでいて時々姪っ子、甥っ子を連れてやってきます。ずーっと僕が何でも一番だったのにその座を奪われそうです。可愛いからまっいいか！！

僕には日中、庵でたくさんのスタッフの方や利用者の方々に関わってもらえて楽しく過ごしています。夕方に笑に帰ります。土・日は実家に帰ります。今はだいぶ落ち着

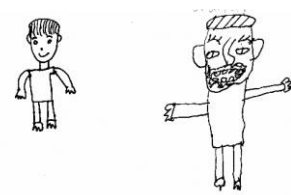
いていますが、七～八年前は入退院を繰り返して医療的ケアが必要になりました。一番しんどい時期でした。そんなたいへんな時に笑に入れてもらい自立生活を始める事が出来ました。

たくさんの職員の方が僕の為に講習を受けてくれてお世話をしてもらえるようになりました。宿直の方は一睡もできなかったと思います。家族だけでは、とても無理でした。

そうそうの杜のお陰で今の穏やかな日々が過ごせていると思っています。心から感謝しています。

これからもどうぞよろしくお願いします

**\*講習…喀痰研修（医療的ケアについては研修を受けてから実施できる）**



### 伝 松山 陽希さん（両親より）

そうそうの杜創立 20 周年、おめでとうございます。

自閉症の息子が「伝」にお世話になり、早 10 年になります。今では支援校の中学 2 年生となり、元気に通学出来ております。

でも、「小学校の間は、出来るだけ地域の小学校で過ごさせてあげたい。」という親の希望で地域の小学校に入学しました。

暫くすると、息子は学校に行く事を嫌がるようになりました。そんな時、「伝」のスタッフの方から、「学校に行かなくても、いつでも伝には来てくれていいですよ。」「待ってますね。」と声をかけて頂き、「でも、お母さん、息子さんの代わりに、声を出してあげてね。それが出来るのは、お母さんだけですよ。」とも言われました。それからは、息子の障害について、理解を深めてもらえる

様、先生方と何度も話し合いをしました。

「伝」のスタッフの方にも参加して頂き、お陰で息子の「居場所」を見つけてあげる事が出来ました。

そして無事、6 年間を過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

これから息子も、大人になっていきます。まだまだ、障害者への深い理解が広まっているとは言えない中、社会に出て行けば、辛いこと、悲しいこと、様々な困りごとに遭遇していくと思います。

そんな時、そうそうの杜に行けば、自分の「居場所」が必ずある。親の勝手な思いですが、そうそうの杜は、そんな存在であり続けて欲しいと願っております。

そうそうの杜の益々のご発展をお祈り申し上げます。

### 真山 幸子さん（真山 斐名さんのおかあさんより）

初めに、そうそうの杜創立 20 周年おめでとうございます。

そうそうの杜との出会いは娘が 1、2 歳の頃でした。娘は重度心身障害があり私に予定があっても一緒に連れていく事が難しく困っていました。その頃は児童デイサービスがほとんどなく、私が住んでいた区では受給者証も発行されませんでした。友人から教えてもらい城東区にあるそうそうの杜にお電話しました。

理事長の荒川さんに面談してもらい児童としては初めて受け入れてもらい日中一時支援を利用させていただけることになりました。

一度、引っ越しが理由でそうそうの杜から離れましたが、1 年後、城東区に戻って来た時荒川さんの名刺だけが頼りで連絡を入れさせて頂きました。その時にはそうそうの杜に児童デイサービスの伝がある事は聞いていたので利用したいことを伝えました。平成 20 年の 4 月頃に連絡を入れたのですがその時には空きがなく、少し待つ事になりましたが 7 月から伝を利用することが出来て今現在も利用しています。伝以外にもショートステイで添、移動支援でとことこっとも利用しています。本人は家で過ごすのが好きなので添に行くときや移動支援で外出する時には嫌がり、大声で泣いたりしま

すが現地に着くとすっかり馴染んで楽しんでいます。

今現在 17 歳の娘が 1、2 歳の頃からそうそうの杜とはお付き合いがありますが、今一番思い出に、残っていることは、私が目の病気になって急遽治療しないとイケない状況になった時、主人も出張で添の利用をお願いしましたが定員がいっぱいとのことで断られました。どうしようかと悩んでいたところ利用していた伝のスタッフが一泊します。

### 「子どもの成長をあきらめない支援」

藤本 純子さん（藤本 玲奈さんのおかあさん）

そうそうの杜、創立 20 周年おめでとうございます。

私とそうそうの杜との出会いは、娘がまだ 2 歳になる前でした。娘の発達の遅れと子育ての困難さに悩み、区役所で行われていた「障害児・者なんでも相談」というところに行った時、相談に乗ってくださったのがそうそうの杜の方でした。その日のうちに伝のスタッフの方がお電話をくださり、「一度うちに遊びに来ませんか？」と声をかけてくださいました。障害のことも何も知らず、受給者証もまだ持っていない時でしたが、藁にもすがる思いでお邪魔し、たくさんのお話を聞いていただき、手続きのことなども教えていただきました。

その頃、伝のスタッフの方に「お母さん、どんな子どもも 20 歳までは必ず成長します。この子も必ず成長しますよ。」と言っていただいた言葉が今も私の子育ての大きな心の支えとなっています。

あれから 11 年、娘も今は中学生になりま

てくれたことです。娘も慣れない状況で眠れるかなど心配していましたが、慣れたスタッフだったので私としては安心して任せることが出来ました。その節は大変助かりました。ありがとうございました。

最後に、これからも人びとのよりどころとして幸せをつくる法人を目指してください。

ご発展を心よりお祈り致します。

した。伝のスタッフの方々は、ずっと変わらず、「子どもの成長をあきらめない」で、娘にできることは何か？どうやったらできるようになるか？とあたたかく根気強くご支援くださっています。重度の知的障害のある娘ですが、小さな積み重ねで娘のペースで少しずつ成長してきました。娘は 2 歳からトイレトレーニングをして、親は途中で何度もあきらめましたが、伝のスタッフの方は一度もあきらめず、7 歳で初めて成功したときには涙を流して喜んでくださったことを昨日のことのよう思い出します。

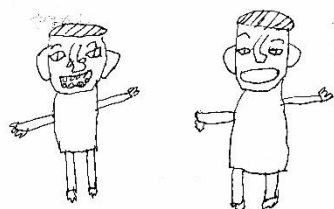
今までにいろいろなことがありますが、どんな時にも娘の成長を信じて支援して下さっている伝のスタッフの方々、また子どもと家族にいつも親身に寄り添ってくださる相談支援員さん、他にもたくさん方々に支えられて、私たち家族は笑顔で暮らすことができていることを、心から感謝しています。これからもそうそうの杜のスタッフの方々に助けていただきながら、娘と一



緒にゆっくりと成長していけたらと願っています。

最後になりましたが、そうそうの杜がこれから先も 30 年、40 年と今までのように

あたたかく地域に根差した法人として、ますますご発展されることをお祈りしています。



## 【理事編…外部】

宇野 達美さん

ミャンマーでクーデターが起きた。民主化を求めて、多くの人々が戦っている。というニュースを見て、「これはひどい」とも「民衆の闘いがすごい」とも思っていた。

その矢先、そうそうの杜の理事会で、ミャンマーからの留学生を 7 人アルバイト雇用しているとの報告を聞いた。

さすが、そうそうの杜！こんなに早く海外の民主化にも連帯しているのか、とも思ったが、それは思い過しで、たまたま（とっては失礼だが）、知り合いの方の関係で雇用した人たちがミャンマーの人だったようだ。

社会福祉法人を退職して、日本語教師の資格を取るため学校に通っていた私に、この留学生たちに日本語を教えてほしいと荒川理事長からお話をいただいた（この人たちは日本語学校に通っているの、この人たちのためよりも、私のやりがい対策のために言っていたようにだが）。

今までニュースでしか見たことがなかったミャンマーだが、ミャンマーから来た人たちと知り合い、話をして、彼ら彼女らも

国の状況に心を痛み、祖国にいるご家族や知り合いの人たちも大変な状況にあることを聞いた。

そして、私はミャンマーのこと、日本との関係のことなどを知りたいと思った。たまたまといえばそれまでだが、こんなにひどい状況にあるミャンマーの人たちと出会えたのも、そうそうの杜だったから、とも言えると感じるのだ。

社会福祉法人は人材確保に苦慮しており、外国人労働者の雇用が進んでいる。この流れは今後も広がるだろう。そうそうの杜も、人材確保のために外国人の雇用をしているわけだが、単にそれだけではなく、彼ら彼女らの生活支援を真剣に考え取り組んでいる。

そうそうの杜は障害者の地域生活を実現するため、そして鳴野の地域を福祉というキーワードで活性化しようと尽力している。鳴野という地域にしっかりと根をはやしている。しかし、同時に様々な出会った人たち、関わった人たちに心底思いを馳せる。それが、そうそうの杜だ。ついに海外にまで

思いが広がった。

今後も色々な人たちと出会い、色々な人たちから学び、色々な人たちへ思いを馳せ、新たな展開を続けていくだろう。そのことを期待する。

そして、海外事務所ができれば、短期間でよいので派遣してほしいなあと、法人化20周年を迎えて思う私なのです。

## 大熊 章夫さん

そうそうの杜20周年、おめでとうございます。

自分としては、法人化以前からのおつきあいなので、20年と言われると短く感じますが。

20年前というと、ちょうど介護保険が始まったころにあたります。そのころから福祉の世界は大きく変わりました。良いも悪いも含めて。「措置から契約へ」、選べる時代になった、と言われてました。社会福祉法人の独占であったのが、様々な運営主体が現れるようになりました。社会福祉法人の閉鎖性、独善性に対する揺り戻しもあったのかな、と思います。

ただ、当時からそうそうの杜は異色でした。一人、大きな法人のおかしさと闘ってるような感じでした。行政の立場でしたが、そこに魅力を感じたものです。制度の大きな変化により、福祉が一部の専門家が幅を利かせるものでなくなり、扉が開きましたが、その後は迷走が続いています。介護保険のようなしっかりと構成された制度でなかったこともあり、制度の見直しが続きました。今は、障害者福祉はすっかりビジネスの一分野になったかのように感じます。これは高齢者福祉や保育園も同じです。規制緩和とは、こういうことかあ、と思いました。コストをかけずに量的に社会資源を増大させ

ようと思うと、こういう手法に成らざるをえません。

行政の仕事もどんどん民営化され、生活保護のケースワーカーまでも多くが非正規の任期付き職員で担われるなど、このままいくと福祉行政は管理部門以外の現業は全て非正規または民間に移行するのでは、と感じます。また、民営化の流れに合わせてか、コンプライアンスと個人情報保護もどんどん厳しく言われるようになりました。逸脱を防ぎ、障害者の権利を守る上で必要な措置かもしれませんが、行き過ぎの感があります。関係機関・行政が連携する妨げにもなっており、結果、処遇困難といわれる人ほど、情報の抜け落ちで支援に失敗することが出てきています。大部分の事業者は、規制に従い、ビジネスを伸ばすことに注力する中、そうそうの杜は、それはおかしい、と言い続けてきたように思います。よく今まで指定取り消しにならずにここまでこれたなあと（冗談ですが）。

われわれは「ビジネス」でなく「福祉」として障害者と向き合いたい、と思います。これから社会がどのように変化するか、読めないところが多いですが、そうそうの杜は今までのスタンスを崩すことなく進んでいく存在であって欲しいと願っています。

## そうそうの杜の20年

乾 伊津子さん

そうそうの杜20周年を心よりお祝い致します。無認可作業所「創奏」として出発され、この20年間で見違えるような大きな飛躍を遂げられました。城東区という地域にこだわり、その人らしい「暮らし」とその人らしく「はたらく」を実現するという環境作りと日々の支援に挑戦され、大きな成果をあげられています。

20年前に誰がそうそうの今を想像できたでしょうか。こんなに大きく多様な事業を実現できた背景を個人的に考えてみました。いくつか要因はあるように思います。

私は日本ライトハウス時代の荒川さんと今から約40年前に出会いました。まだ職リハに就職する前で、大阪市の実験的開拓的事業としてスタートした盲幼児教室（就学前療育）での出会いです。その時の出会いは、私はボランティアで、正規の立場ではなかったものの現在でもその時出会った方々とは強い絆を感じています。關 宏之氏の下で働いていたのもあり、それ以来荒川さんは同じ福祉を目指す同志であり、いつもすぐそばで活動する存在になりました。職リハが就業支援に特化したのに対して、そうそうの杜は、地域のあらゆる社会的課題に対して役所とも協同し、果敢に事業を興していきました。その姿は圧巻でした。そして生活支援のいちばん信頼できる拠点として、また利用者の支援で困った時の砦として「そうそう頼み」というのが私の中に出来上がりました。

そうした関係性の中でお願いしたのが、

職リハの修了生の大量離職の受け皿として作った「山下紙器」でした。任意事業所としてスタートしたものの、法人格が必要になり、困りきった時のそうそう頼みで、一時法人そうそうの杜の傘下に入れてもらったのです。いつも窮地に陥った時は荒川さんに相談しているなと振り返ります。それは「そうそうに相談すれば、なんとかしてくれる」という確信があり、実際断られることはなかったのも事実です。

九州から電話1本で「大阪で働きたい」という人の支援依頼も、そうそうの杜があったから可能となり実現できました。そうした求め来る者は何者も受け入れるというスタンスは、福祉従事者として前提となる姿勢です。しかし現実にはなかなかできるものではありませんが、そうそうの杜ではそれができ、それがそうそうの支援のスタンスでした。これまでの20年の中には、組織としてのガバナンス問題、職員の不協和音、支援の落とし穴、詰めの甘さなど数多く起きて、屋台骨を揺り動かす出来事も一つや二つではなかったと記憶しています。

しかし、潰れなかったのは何故なのか。そこには荒川さんという思いを実現する創業者がいて、そこに集結した職員の皆さんの思いと結束力、城東区という地域がうまく融合した結果ではないかと考えます。現在の障害福祉領域の事業や支援サービスは利用者や支援者の思いより利潤が先にあり、コンプライアンスという名のもとに定型的内容の支援ばかりですが、そうそうの杜の事業や支援には、かかわる職員の皆さん

の意思を強く感じることができます。それが他にない最大の武器です。出会った人たちの必要なニーズに真摯に向き合い、希望する支援を創り、届ける支援はそうそうの杜の最大の強みです。

今後5年後10年後も色あせることなく、ぶれることなく、様々なことに挑戦できる

集団であって欲しいと心より願います。そうそうの杜20周年、まだまだ途上です。

今後も若い世代へ交代しながら、大いにそうそうらしさを発揮していける集団であり続けて下さい。

こころよりお祝い申し上げます。

## 【理事編…内部】

### 創立20周年を迎えて

真頼 正施

私自身は2004年に入職し今日に至る。

2004年は、そうそうの杜が法人化して3年目であり、事業拡大期であった。毎年、新規事業所が立ち上がり、目まぐるしい環境の変化についていくことができず大変だった。

入職当時の私は、グループホーム世話人として配属された。前職が中学校や小学校の講師である私としては、対人支援という意味では同じであり、入職当時は違和感なく従事していた。ただし、生活に密着する度合いは大きく、家庭の責任と本人の責任と私の責任の範囲で戸惑ったことを思い出す。その場しのぎの対症療法が多く、自身の考えがいかにかたまったのか…反省するばかりである。

あれから、17年が経過し自分自身がどれほど成長できたのはわからない。しかし、そうそうの杜で過ごすことで多くの人たちと出会い、ここで過ごした時間はかけがえのないものである。これらの出会いと時間は、私自身を人として成長させてくれ

た。私の他にも、法人に対して同じように感じている人はたくさんいるだろう。

特に印象深いのは、2011年3月11日に発災した東日本大震災。法人としては、1か月後の4月からゆめ風基金と被災地障害者センターみやぎを窓口に、組織的なボランティア派遣を開始した。スピード感のある法人の決定には驚かされた。宮城県の北部を中心に、中断した期間もあるものの2016年まで継続することができた。最終的には南三陸町で出会った人たちが、NPO法人を立ち上げ児童デイサービス、就労継続支援B型を運営するまでになっている。

この間、未曾有の被害を受けた被災地や避難所の現状を実際に自分の目で見ることもできたことと、そこから復興に向けて進んでいく人たちと関わることができたのは、自分の人生における糧となっているように感じる。

また、現在、ミャンマー人留学生の7名をアルバイト雇用している。彼らの日本で置かれている状況は、国軍政府が起こした

クーデターのために、出国時に思い描いていた目標や夢に自分を近づけることができず…かと言って国に帰ることもできず…借金を背負って留学させてくれた家族の安全を願うことしかできない。東日本大震災で被災した人たちと重なる部分が多く、法人として何かできることを模索した。彼らが日本で暮らし続けることができるように…平和になったミャンマーに帰る日まで支えることが、彼らと出会った私たちの役割であろう。

そうそうの杜は、そうそうの杜を利用する障害のある人たちやスタッフにとってどのような存在であるべきか？自問自答する。その理念は、「そうそうの杜は、すべての人がその人らしく生き生きと暮らせる地域と社会を創っていきます」である。障害の有無にかかわらず、すべての人が幸せ

に暮らすことができる地域や社会の仕組みを目指す解釈することができる。法人スタッフのすべてが常に地域や社会を創るために行動しているとは考えないが、利用者に対する支援が最終的に地域や社会の変革につながり、より暮らしやすい仕組み作りの運動につながっていると理解している。しかしながら、時代や社会の変遷にともない、スタッフや利用者の考え方も変化するかもしれない。本当に大事なことはこの理念に凝縮されており、何か困ったときに…何か迷いが生じたときに…立ち返るべきところである。スタッフみんなで作った理念と利用者さんを大切にするスタッフ集団であり続けるために、私たちができることをただ地道に続けていきたいと感じた。法人化されたのちのこれまでの20年に続き、これからの未来においても同様である。

## そうそうの杜 創立 20 周年

山川 真司

20 周年という事で自分の 20 年前から振り返ってみた。当時は全く今の自分を思い描くことはなく。一般企業で営業を主に仕事をする中、何も分からないまま、仕事が出るという事で知的障害のある方を採用し一緒に仕事をしていた事を思い出す。

今回の 20 周年で記念誌を発行するにあたり、「写真集を作ろう」となり古い写真を探したりするところから始まった。実際に写真データを見ながら選んで行く中で、法人としての 20 年を振り返ることが出来、自分が入職してから分については、

特に感慨深く見ることになり、今までを振り返ることになった。自分は 2010 年 11 月 1 日入職。入職前の運動会の夜、反省会に出席した時の事は何故かよく覚えている。

入職時には、どういった法人なのか？何をどうやっているのか？全く分かっていない中でのスタートだった。あれから約 11 年になるが、今考えると何もわかっていない当時から一番大事にしていることがある。「人と出会う」である。

そんな私の中で入職からの今までで心残りなのが 2012 年春、二年目直ぐのころで

あるが、宿直時の朝に起きた一人の利用者の方の死である。今の自分なら・・・、違った結末が迎えられるのか？また、自分が今そうそうの杜にいるのは何のためだったか？を考える時に必ず思い出し、自分が今を続ける原動力になっている。

他にも自分がそうそうの杜の中で11年居て、沢山の事を経験してきた事、沢山の人に出会ってきた事が、かけがえのないすごい財産だと写真を見ながら思い出された。

いろんな利用者と旅行をしたこと。入職して就労旅行をはじめ、他部署・就職者の旅行と本当にたくさんの人と旅行を通して普段とは違う顔に出会えて、楽しさも共有できた事が写真を見ながらも思い出され、その時々々の皆の顔が思い出された。今のスタッフにも同じように味わってほしいと思うし、また行きたいとも思う。

他にも城東区の自立支援協議会で就労部会の立ち上げに携わった事。大阪市就業・生活支援センターを受託し、都島区・旭区・鶴見区・城東区の事業所に呼びかけ事業所説明会をした事。東北へのボランティア派遣など。とにかく何かやろうとした

ら、やらせてもらえる法人だった。もちろんやるように言われたこともあったが・・・5年ぐらい前だったと思うが荒川理事長との話の中で、自立支援協議会の事で自分が行き詰まるというかどうしたらいいんだろうと考えている時に言われた言葉が、ここ最近ではよく思い出される。それは、「一般的にはギブアンドテイクと言う言葉があるが、自分たちはギブギブギブと考えてギブし続けることが必要なんだ」という言葉である。その時は、そんな風に考えているんだ、というぐらいしか思っていなかったが、今では何かあるたびにそのことが脳裏をよぎる。振り返ると本当に楽しい11年だった。

6年前には、スタッフ全員で理念を考えるという機会があり今の理念を作成した。

「そうそうの杜は すべての人が その人らしく 生き生きと暮らせる 地域と社会を 創っていきます」 ほぼ一年かけてよく話し合えた年だった。今はこの言葉がすっきりと入ってきている。だからこそ今いるスタッフに、これから入職する人たちに、この言葉にはどういう思いがあって出来たのかを伝えていきたい。





## 【評議員編】

### 城東区身体障害者福祉会

石原 正美さん

創立 20 周年を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。

荒川さんに出会ってから 20 年、早いものですね。

熱意に燃えた、障害のある方々の福祉増進のための各種事業の積極的な展開にご尽

力され、障害のある方々の福祉向上・社会参加を図ってこられました。

20 周年を大きな節目として、今後とも積極的な活動をされますようにご期待申し上げますとともに、そうそうの杜ますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

### そうそうの杜 20 周年を迎えるにあたって

株式会社 りある（ヘルプセンター りある）

代表 綱嶋 尚至さん

20 周年、おめでとうございます。

皆様にとってはあっという間の 20 年だったのではないのでしょうか。

そしてこれから先も、あっという間に過ぎていくのだと思います。

その間に法人として何を実践していくのか、これからも皆様の動向が注目されていくのでしょう。

今、鳴野界限はそれこそ「そうそうの森」になっている様にみえます。これからは、鳴野

を超えて城東区、大阪市全域へとそうそうの森を拡げ、

「そうそうの杜は、すべての人がその人らしく生き生きと暮らせる地域と社会を創っていきます」を浸透させ、実践していった欲しいと思います。

そうした皆様の活躍を刺激に、私も負けないように事業展開していきます。

### 株式会社 夢空間

永島 健一さん

そうそうの杜の創立 20 周年を心よりお祝い申し上げます。

この 20 年間の歩みを振り返り、改めて荒川理事長をはじめとするスタッフの皆さまの障がい者への思いが本物であるという

ことを実感しております。

私がかつとも素晴らしく感じるのは、そうそうの杜の取り組みが一貫して城東地域に根差していることです。営利企業がビジネスとして広域に事業展開する時代にあっ

て、そうそうの杜の取り組みはぶれることなく城東地域に暮らす障がい者の幸せに焦点があてられていると感じています。そのぶれない理念をもって20年間実践された地域福祉は、障がいのある人だけではなく、地域に暮らすすべての人々の貴重な財産となっていると思います。

弱小ながら同じ世界で事業を展開している私には、いくら賞賛してもしきれない程、そうそうの杜の取り組みは地域に根差した価値のある実践にうつります。そして、“障がい者福祉はかくあるべき！”という時代を超えた真の理念がそうそうの杜の取り組みにはあると信じています。

若い世代も多くなり若い人たちの福祉のとらえ方も様々だと思いますが、温故知新

という故事成語がぴったりの法人だと思いますので、20年間のそうそうの杜の取り組みをベースに10年後、20年後にさらなる発展を遂げていただきたいと思います。

20年後荒川理事長は90歳、私は80歳になりますが、ヘルパーに介助されながら、願わくは自力でシャキッと40周年式典に参加することを今から楽しみにしておきます。ぜひ、そうそうの杜を背負って立つ若い世代の人たちには、法人を乗っ取る勢いで楽しくかつパワフルに頑張っていただきたいと思います。

そうそうの杜がこれからも地域とともに歩む社会福祉法人として、さらなる発展を続けられますことを祈念し、お祝いの言葉といたします。

## 福祉のすそ野は広がっているのか？—そうそうの杜20年に寄せて

一般社団法人まはえ 森 統一さん

そうそうの杜が設立20年と聞いて、20年前はと省みると、2001年はまだ措置の時代で、その2年後に支援費制度、さらにその3年後に障害者自立支援法の施行という契約制度に移行していく転換期に法人が設立されたということに気づきました。契約制度は、主に自治体や大きな古くからある法人が担っていた施設中心の福祉から、それまでは作業所などを任意に作って活動していたところも、法人格を取得して、一定の要件を満たせば国の制度として、事業を行うことができるという変化を生みました。さらに、これまで福祉と全く関係のなかった会社なども事業を始めることにより、福祉の量的拡大につながり、特に都市部では、20世紀には考えられなかったほど巷に事業所

が点在するようになりました。支援費以前は、障害者の地域生活を支えるところが圧倒的に不足していて、何はともあれ、街中でいろんな事業所を目にするようになったことは素直に喜ぶべき側面があることは確かです。

ですが、他方、福祉的な精神といったらいのか表現には苦慮しますが、良くも悪くも福祉事業所が、一つの働き口であるというサラリーマン的な精神や思考法が蔓延するようにもなったと最近とみに感じるようになりました。一例を挙げれば、単なる言葉遣いといってしまえばそれまでですが、正職員のことを“社員”という言葉で躊躇なく使われていることに、私なんかは強い違和感を覚えてしまいます(まあ、株式会社

が運営している事業所も多いので、むしろ私の違和感の方が不思議がられるのかもしれませんが)。

法令遵守・行政指導やリスクマネジメントという観点から、自分の職域や職務内容という範囲には熱心で、管理体制や書類づくりがうまいことが尊重され、そこに力を注がざるを得ないという昨今の姿は、何を大事にしなければいけないのかという本質からずれているように思わざるを得ません。制度的に求められている職務から少しはみ出たところ、利用者の生活全体に関わる視点・関わりがどうなのか、自分の足元や周囲の事業所を見ているとよく感じてしまうものです。何よりも今ある制度に甘んじるの

ではなく、制度を批判的に捉え変革しようという気概を持つことは、今や昔の話ということになっている気がしてしまいます。一定の制度ができると制度がなかったころのがむしやらが失われてきているのかもしれない。

そうそうの杜は、法人内で各種の事業をされているので、制度外のことも含めて法人内で完結することも多いのかもしれませんが、望ましいのは、地域の様々な特色を持った法人・事業体がお互いの強みを発揮して、一人一人の生命と(健康で文化的な)生活が保障されるような社会を作っていくことだと思います。そんなこともこれからのそうそうの杜に期待したいと思っています。

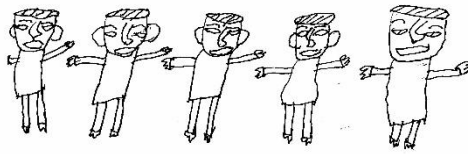
#### 創立20周年を祝して NPO法人燦然会 沼守 紀之さん

このたび社会福祉法人そうそうの杜が創立20周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

さて、今日では、少子高齢化や核家族化が進み、地域とのつながりが希薄化しております。人が暮らすのは地域です。その地域を耕し、種を蒔くという地道な活動をしていくことが、人と人のつながりという花を咲かし、その花が増えていくことが本当の意味での誰もが住み慣れた地域で暮らすことにつながるのではないかと思います。貴法人におかれましては、福祉サービスの事業運営に加えて、もうすでに商店街活性化

の取り組みなど地域に根ざした活動をされ、地域のみならずからも絶大なる信頼を受けておられることと思います。昨今、福祉に関する問題や課題は多様化・複雑化しておる中、地域に根付いた取り組みを続けていくことが、問題解決の切り口になるのではないかと思いますので、なお一層の活動の広がりとなりますことを期待しております。

最後になりましたが、創立20周年を機にますますの発展をされますよう心からお祈り申し上げまして、ごあいさついたします。



## 【監事編】

### そうそうの杜20周年にあたって 竹中 康豊さん

この度は、20周年お祝い申し上げます。思い起こせば平成13年、蒲生創奏の2階の作業場で、長机を囲んで設立理事会をしたこと、ついこの前のように蘇ってきます。設立当時から監事をお引き受けし、10年ひと昔とありますが、ふた昔、もう20年もたったのかと、感慨深く感じております。

当初は創奏・座座の2事業でのスタートでしたが、とことこつとを開始したあたりから、利用者・従業員・収入とも一気に膨れ上がり、現在の事業・財政の基盤が築かれました。今では、自前の物件も持ち安定した財政状態を保ちながら運営されていることを大変喜ばしく思っております。

私自身、もうしばらくすれば古希を迎えようかという年齢になり、時折体力の衰えを感じるようになってきたところですが、お役をお引き受けしているうちは頑張らね

ばと思っている次第です。

人間は誰しも自然死というものがあり、いずれはこの世に存在しなくなるのですが、法人は借金でお金が回らなくなり破産でもしない限り、死というものはありません。目まぐるしい変化の中、あと20年先30年先がどのような世の中になっているのか想像もつきませんが、人（利用者・従業員）・お金は人間でいう血液のようなもので、動脈硬化みたいなことをおこさないよう法人が存続することを願っておりますし、支援を必要とされる限り法人は存続するものと確信しております。日々世の中は変わっていきますが、法人の事業に従事されるおひとりおひとりが、時代に沿った支援・運営を続けられることを祈念して20周年の投稿といたします。

**創立20周年に寄せて**  
**(社会福祉法人 和) 鍋島 康秀**

創立20周年おめでとうございます。この原稿を書くにあたり、改めて法人の沿革を見返して感じることは、平成7年4月無認可作業所「創奏」開所以降、ほぼ毎年のように事業所移転や新規事業の開始があることに驚きます。

そして、平成13年10月社会福祉法人の認可を受けて以降は更に加速度を上げて事業展開が為されています。当時の社会福祉を取り巻く時代背景としては、迫りくる少子高齢化社会に備え、この国は高齢者福祉分野においては、介護保険制度の創設、年金等社会保障の行く末についても本格的に議論がはじまりました。

これら総体を一般に「社会福祉基礎構造改革」と称しますが、その本質はあらゆる産業分野に及ぶ規制緩和、ドラスティックな改革(※郵政改革等…)でした。当時の首相のポピュリズム的政治手法により多くの国民が熱狂的に支持をしました。

あれから20年以上が経ち、この国にもたらされた現実をどのように評価するか？ここでは言及しませんが、私たちは社会福祉、とりわけ障害福祉分野に携わる者として評価、反省しなければならないと思います。

そんな意味で現在の社会福祉法人そうそうの杜の存立は、これまで述べた障害福祉分野の規制緩和の大きな波の上、その最先端の波に乗ることによって成立していることを自覚しておくことは重要だと思われます。

すなわち、このポピュリズム政治によってもたらされた新自由主義的な社会を前提とした社会福祉分野の障害福祉こそが現在の私たちの実践の内実なのです。利用者本位や利用契約等という言葉によって惑わされますが、要するに「自己責任」が全ての情け容赦ない社会に社会福祉法人も組み込まれてしまったのです。

私自身、長年、社会福祉法人に身を置き、障害福祉分野に携わる中で感じてきたことは、そうそうの杜をはじめ多くの社会福祉法人の事業展開の「速さ」です。利用者のニーズを捉え、それを事業化してニーズに応えるということは必要なことでしょう。

しかし、残念ながらその「速さ」ゆえに、私たちが最も大切にしなければならない人材育成や支援の質を犠牲にせざるを得なかったこともあるのではないのでしょうか？「相模原障害者施設殺傷事件」の植松聖の人間観に象徴されますが、この一連の社会福祉分野の改革によってもたらされた有形無形の傷は計り知れないものがあると感じています。

社会福祉法人そうそうの杜は20周年を迎え、これから証明していかなければならないことは、この間の事業展開が単に法人の拡大主義ではなく、障害当事者の願いに基づいた障害福祉実践であることだと思います。これからの20年は、これまでの経験値の上に、とことん支援の質や内実にこだわった障害福祉実践を期待いたします。

## 【スタッフ編】

20周年を迎えて…

杜の Shokudo Kawasemi 小澤 奈津

私がそうそうの杜に入職したきっかけは、大学時代に全身性の障害のある方の所でヘルパーのアルバイトをしていた時にその方と就職の話になり私は作業所みたいな所に就職したいと思っていますがなかなかみつからないと話したら、城東区保健福祉課だった大熊さんを紹介してもらい、創奏を紹介してくれました。初めて創奏に行ったときは、蒲生四丁目の東大阪病院の隣の長屋でたくさんの利用者・スタッフが必死で植物の砂を計量して袋に入れたり、けしごむの検品や箱詰め作業をしていた事を今でも覚えています。

楽しそうに仕事をしている様子を見て私も手伝いたいと思い、毎週ボランティアで作業に参加させてもらう事になりました。何回もボランティアに行っているうちに利用者が次いつ来るの？と声をかけてくれるようになり、私もここで働きたいと思いました。

毎日、和気あいあいと仕事をする事がとても楽しかったです。当時の創奏には色々な方が集結していて昼で寝ている人や二階で織物をしている人など色々な利用者がいましたが、それぞれの役割がありお互いを認め合っていました。

その当時は創奏と座座しかなく、スタッフは正職が3人しかいませんでした。私の中に作業所の仕事に対しての甘いイメージがあったのかも知れませんが、消しゴムの

検品ミスや入れ間違い、シールの破れ等で業者さんにめちゃくちゃ怒られて、外で1時間くらい注意を受けることもしばしばありました。その様子を周りのスタッフや利用者が見てミスは出さないように協力してくれました。

下宿屋や GH はまだなく、レスパイトとして野江に家を借り利用者スタッフ何人かで泊まった事もありました。思い出すと色々な思い出が出てきます。Kさんの透析をしていた事や、Tさんが一人暮らしを始めた初日にお湯が沸かないと SOS があり自宅へ走った事、Wさんが創奏の近くに来てもなかなか中に入れず初めて創奏の中に入れた時に一緒に大喜びした事…大きな家族みたいなものでした。

スタッフや利用者関係なく年とったらみんな老人ホーム入ろうとよく言っていた事を思い出します。一泊温泉旅行や、海水浴、キックベースボール大会、運動会、クラブ活動たくさんの事を一緒にやってきました。仕事が終わってからスタッフや木本さんと一緒によく豚吉(ラーメン屋さん)へ行った事も覚えています。

その後、法人がどんどん大きくなり GH やヘルパー事業所、本部移転やディサービスなどが出来て創奏にいたメンバーはバラバラになりました。それが良かったのかどうか今でも考えるときはあります。

私自身の生活環境も大きく変わりました。



結婚、出産、子育てを経験する中で働く事の厳しさを今も感じています。そうそうの杜の女性スタッフに結婚しても子供が出来ても正職で働く事が出来るんだと言うことを伝えたいと思い働き続けてきました。

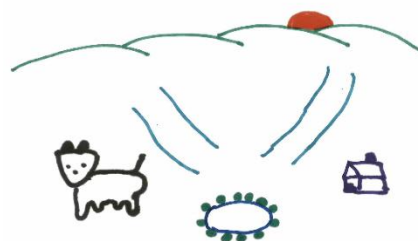
今でも周りのスタッフや利用者、家族に支えてもらい子育てと仕事を何とかやっています。昨年、私が体を壊し毎日点滴に通う日々があり、もう仕事を辞めようとも思いました。でも、毎朝点滴してから出勤すると待ってくれているスタッフ、利用者がいてとても心配してくれ乗り越えることが出来ました。

今後も、そうそうの杜はまだ事業を広げて大きくなっていくと思います。必要な資

源を作ることは大切な事だと思いますが、これだけ法人が大きくなってしまうと法人の思いの部分が新しく入ったスタッフには伝わりにくくなっていると感じています。また、私たちが伝えていく立場になったんだと思います。そんな中、最近嬉しかったことは荒川さんの誕生日祝いをスタッフの全体朝礼でやれたことです。たくさんのスタッフに祝ってもらえて荒川さんはとても幸せそうでした。こんな家庭的でほっこりする理事長の誕生日祝いが出来るのは、そうそうの杜だからだと思いました。

いつもまでもそうそうの杜がスタッフにも利用者にも寄り添える法人でありたいと思います。

### そうそうの杜 20 周年を迎え振り返る 伝 勝呂 拓馬



私がそうそうの杜と出会ったのは今から15年も前にさかのぼります。当時の私は中学一年生であり、母子寮に入所し母と2人暮らしでした。ある日突然母の家出をきっかけに母子寮に住めなくなり、ケースワーカー通じて荒川さんと知り合って出会います。住むところがないため、その時は緊急でショートステイ（添→現綾）に1ヵ月ほど泊まり生活をしました。ですが、母が行方不明という事とその間に荒川さんが親権者になれないという理由で1ヵ月が経つと児童施設の入所を余儀なくされ、私は中津学園に3年間入所しました。

入所後もそうそうの杜との関係が無くなる事はなく、月に一度はこちらへ会いにきれくて外出や外泊をして添を利用したり

そうそうの杜の行事に参加しました。会いに来てくれたスタッフは荒川さんをはじめ当時居た（吉見さん・吉村さん・永野さん・永海さん・富吉さん）また、現スタッフの、田島さん・真頼さん・林さん・六田さんでした。施設内で度々問題（他の利用者を叩く）（物を盗る）を起こし問題となるとすぐに荒川さんから学園へ電話がかかってきて電話越しに直接説教されたことをよく思い出します。

中学校3年生となり今後の進路を決める際、学園で何度か会議を開き私と荒川さん・吉見さん・真頼さんで話した事もありました。荒川さんからの提案として一般校への進学という案がありましたが、私にとって経験のないことと今までは支援学校へ

通学していた分、学力にかなりのハンデがありとても、一般校でみんなと共に授業だなんて・・・と自信は全くありませんでした。

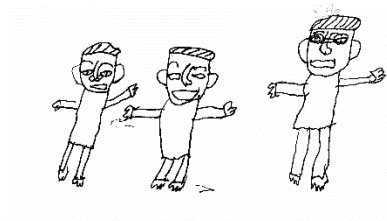
中学校3年生の冬から英語・数学・国語と家庭教師を添に招いて勉強し、どれも小学校低学年からの問題を半年という期間で凝縮して取り組んだことを覚えています。がむしゃらにわからないままやったこともあり何度も途中で「あ。やっぱり一般校やめて高等部に行きたいわ楽やし」と学園のスタッフに弱音を吐いた事もありました。それ程、私の中で「努力する」という事は嫌いで苦手で、できればしなくなかったことであり、今までも生涯の中でしたことがなかったからです。分が悪いとすぐに言い訳をして嘘を平気で付く自分はこの先一般校へ進学しそうその杜で生活を新たに行っていくなかで、自分自身にも他人にもごまかしてきた人生を今後はごまかせなくなるのではないかと、という不安から常の逃げる事だけを考えていました。そんなヘタレな私でしたがしっかりと周りのサポート（そうその杜の人たちと支援学校の校長・副校長・恩師）のおかげで無事に試験に受かり入学できました。一人の人間に対してこれだけの人物が動くことを今考えてみると贅沢であったし何よりもありがたい事だったなとしみじみと感じます。

そして入学後も数々の問題を起こしその

たびに荒川さん・吉見さんに事務所へ呼び出されて説教されたことは言うまでもなく数えきれないほどあり、時には強烈なビンタまで受けた事は今でも鮮明に覚えています。そして高校を卒業し、就職してからも常にそうその杜との関りはあり、始めて一人暮らしを始めた場所はカワセミとどことことと事務所の近くでした。

仕事で上手くいっている時も行っていない日も事務所に顔を出して毎度荒川さんと昼食を食べた事もありました。社会人になっても私の根底にある逃げる癖は治らずそれが荒川さんにばれればすぐに呼び出され淡々と説教（今も）されたこともあり、家庭を持った際には「うちで働いてもいいよ」というお言葉についつい甘えてしまい、今ではそうその杜のスタッフの一員となり日々働かせてもらっています。そして今後も自分の事、家族の事（妹・弟）含めて厚かましいですがまだまだそうその杜にはお世話になるつもりです。

出会いは中学生1年生の夏、そして今年で26歳となりほとんどの青春時代をそうその杜で過ごしてきたからそこ綺麗ごとというのではなく、ごく自然に「そうその杜ってこんなところでこういう人たちがいてここがいいところだよ」と言えるスタッフに成長していければなと思います。まだまだ未熟で浅はかな私ですが今後ともよろしく願いいたします。



## 地域生活支援センターあ・うん /ホームヘルプセンターとことこっと

奥野梨沙

法人設立 20 周年を迎え、自身が入職して 17 年目となりました。

この 17 年間は、そうそうの杜と共に人生の大半を過ごしてきたことになり、改めて振り返るとそんなに時間がたった事に驚いています。

入職して配属されたのは、「身体障害者デイサービス部・知的障害者デイサービス部」と言い、今のげんげん・庵の前身であるデイサービスでした。デイサービスで 8 年勤務し、その後、「ホームヘルプセンターとことこっと」で 9 年、「地域生活支援センターあ・うん」でケアマネージャーとして 6 年程（兼務）勤務しています。

入職して間もない頃に荒川理事長より「人の生活は 365 日 24 時間続いている。日中・生活で区切る事はできない」と言われた事がありました。

その時は、深く意味も考えず、「そうなんだ」というぐらいにしか捉えていませんでした。

その意味を深く考えるきっかけとなった出来事に利用者の看取りがありました。

その方は、知的障害で法人内のシェアハウスに入居しており、悪戯好きな 60 代後半の方でした。病状が急変し、末期の腎不全と診断され、すぐにでも透析治療が必要と診断されましたが、本人に病識がなく病院での治療に抵抗もある方でした。シャントの増設手術をする事にな

り、急遽入院となりましたが、本人の理解が難しいため、不安から病室で大声で叫んだり、治療への抵抗もあり、一人では入院できない状況でした。命を守るためにと法人全体で交代しながら 24 時間本人に一週間程付き添い、何とか手術を無事に終える事ができました。

手術は成功したものの、本人の様子をその間見ていた病院側から「これだけ暴れたり、抵抗があると治療・入院は難しい」「透析の最中に事故になる可能性がある」と言い渡され、治療困難と診断を受け、その際に余命 1 か月の宣告をされました。

その時は、本当に何とも言えない気持ちで後悔の気持ちと申し訳なさで一杯だった事を思い出します。残された時間をどう過ごしてもらうのか、本人がしたい事は何かと職員同士で話し合い、できる限りの事をしようと決めました。

しんどさから夜通し泣き続けたり、うめき声をあげ、時には真夜中に「たこ焼きこうてこい」とオーダーされたりと、急変するかもしれない不安とほぼ睡眠がとれない状況もありましたが、事業所を超えて皆が一致団結していたように思います。

その方は、余命 1 か月と宣告はされていましたが、結果としては余命宣告されてから 1 年数か月で寿命を全うされました。

この出来事は、自身の中でも法人全体

としても、最後まで本人と向き合い続けた貴重な時間だったように感じます。

法人設立 20 周年を迎え、利用者や職員の生活や考え方の変化もあり、昔のそうその杜とは変わってきたように感じま

すが、これからも利用者の想いを受け止め、その人らしい生活の実現に向けて、一緒に考え、向き合い続ける存在でありたいと思います。

## げんげん 橋本 秀貴

私はそうその杜が設立されて 4 年弱、平成 17 年 8 月に入職しました。

それ以前に前の仕事の関係で、その当時の本部（現在のげんげん）を訪問した時に、小規模でゆったりとした雰囲気の魅力を感じていました。

入職してまず配属されたのが「ホームヘルプセンターとことこっと」でした。4 年半ほど「とことこっと」で働き、その後は「げんげん」「創奏」と生活介護で働かせてもらい、このほど 16 年が経ちました。

この原稿を書く前に、この 16 年を思い浮かべると、頭に浮かんできた多くが入職 1, 2 年目のことでした。生活介護で働かせてもらっている期間を含めて、その後も印象に残ることも勿論多いのですが、やはり当初の時のことが深く残るものなのでしょう。今回はその時のことを中心に書かせてもらいます。

「とことこっと」に配属になってすぐの話です。近年に利用を始められた利用者さん、ご家族、またスタッフには想像が付きにくいかもしれませんが、その当時は荒川理事長自身がヘルパーとして利用者さん宅に訪問をしており、それを私が引き継ぐことが何件ありました。その全てではありませんが、利用者さんについての簡単な説明と住所を教えてもらい、ヘルパーに入るよう

に指示されたことを思い出します。

また、グループホーム（当時）「綾」に初めて宿直に入った時、宿直明けの朝に入居者の I くんをデイサービスに送る事になっていました。まだ土地勘がほとんどなかったので、事前に「綾」からデイサービスの道順は確認していました。が、I くん「道わかってる。こっちこっち。大丈夫。」という言葉に、見事にはまってしまい、本来到着する時間をかなり過ぎても、見た事のない風景。住所を確認すると、知らない地名が……。デイサービスに電話して事情を説明して、かなり遅れて到着したことを覚えています。

「とことこっと」はで働いていた時、一番印象に残っているのが、とことこっと利用者の第一号であった H さんとお墓参りに行った時のことです。

視覚障害者である H さんが、田舎である香川県坂出市にお墓参りに行きたいと希望があり、一泊二日で同行させてもらいました。お墓の近くにあるという目印の場所まで行った時、H さんにお墓の住所を聞くと「分からん」。墓地の名前はと聞くと「分からん」とのこと。そこからは H さんの記憶とともにお墓の場所探しとなりました。

10 年ほど前の記憶ということでしたが、けっこうしっかりと覚えておられました。ただ、なんせ 10 年前の記憶で町の風景も

変わっており、話が食い違うことも多く、やっと見つけた時はそれはそれは嬉しくて。

その時は知らされてなかったのですが、翌日に従兄弟に会いに行かれました。Hさんが従兄弟に電話連絡されている時、「昨日従兄弟さんに、お墓の場所聞いてくれば」と心の中でつぶやいていたのを思い出します。

ヘルパー業務の方は「どうにかなるだろう」という雰囲気があり、Iくんの件については、周りのスタッフも「Iくんにやられた

なあ」という感じでした。そのような牧歌的な雰囲気に加えて、Hさんの件にあるように、利用者さんの要望にはできるだけ応えていこうという空気がありました。

20周年を迎えた現在、根本的には変わってはないのですが、法人全体の規模も大きくなり、利用者さんやスタッフはこのようなことを感じてくれているんだろうかと思う事もあります。率直に、感じてくれていれば嬉しいなと思います。

### 「20周年に寄せて」

庵・いま福の家 田島 直人

私がそうそうの杜と出会ったのは2004年10月。もう出会ってから17年になる。今でも金木犀の匂いがする季節が来ればその頃を思い出す。その中で楽しい事はもちろん、しんどい事や悲しい事や辛い出来事、出会いや別れも数えきれない程あった。しかしその同じ時代をそうそうの杜と共に過ごせたことは私にとって誇りである。

そうそうの杜と出会ったきっかけは特別なものではなく、当時私は外国での滞在を終え日本に帰ってきてふらふらしていた。何かする事はないかと考えていて奈良にある自分の弟の作業所に行った時に楽しかったのがきっかけ。その足で職安に行ったという流れだ。私が入った時は丁度支援費制度が終わりの頃、自立支援法になるから反対デモに参加等といった時期だった。私の最初の仕事とはある利用者家族の家財道具を軽トラで運ぶという仕事だった。事情があってそこからこっそり引越しをするとい

う話だ。初日から新人の私にとってよく分からない仕事からのスタート。最初に教わった事はロープの結び方。その道中軽トラの助手席に揺られながら、窓から金木犀の香り。だからその匂いで覚えている。入って最初の数年、直接的な支援に関しては殆ど教わらなかったが、扉の修理やお節作り等それ以外の事は沢山教わった。今思えばそれはこの仕事に全部繋がっていたと懐かしく思い出す。

関わった全ての人や出来事は忘れる事ができないが、入ってすぐ綾（グループホーム）の担当になってそこで出会ったMさんの事が特に忘れられない。当時砂川厚生センターという大きい入所施設から地域移行という事で綾に来た彼。出会って関わらせて貰い仲良くして貰い、程なく末期の癌という事が分かった。頭が真っ白になった。入所してから40年以上たってやっと地域に出られたのに。彼の入所時代の食生活など

もあったのだろうか。病気がわかってからは余命をどう過ごして貰うか、ああ良かったなと思って貰えるか。彼の話す言葉がわかってくるようになった矢先の出来事だった。それからは必死で関わった。彼の兄弟がいる思い出の地の宮崎県にも飛行機で一緒に行った。そのときもう既に足はパンパンに腫れ痛み止めを持参しながらの旅行であった。そのうち歩けていたのが車椅子になり急速に動けなくなってきた、食事も柔らかいこ焼き位しか受け付けなくなってきた。一緒に過ごしている時ホームで大量に下血してそのまま入院。そのまま彼の「家」である綾に戻る事はなかった。亡くなる少し前病院で付き添っている時、足がむくんでモルヒネを最大量入れても痛い痛いと言われて足をさする事しか私にはできず。やっと地域で当たり前に暮らせるのに、と悔しい思いでいっぱいだった。最後は彼の「家」である綾でと思っていたがもうここでもいいと言われ病院で逝去された。人生でこれほど悔しくて泣いたのは初めての出来事だった。「(やっと施設から出られて)今からやんか。」って。私はまだ入ったばかりで必死だったから本人が満足できたかは分からない。ただ初めて担当になっていつも一緒にいたから私にとっては家族みたいな存在でした。亡くなられて私の心は抜け殻の様になりやめようと思ったのもこの出来事だし、続け

ようと思ったのもまたこの出来事。今でも命日の9月と彼岸には彼の墓に会いに行く。そして最後まで食べられていたたこ焼きや、好きだったコーラとそして花を供える。

この出来事から始まって今まで職員、利用者問わず様々な人の人生と出会い、別れを繰り返してきた。もちろん良い出会いや別れもあったし、悲しい、悔しい別れなど様々あった。それぞれ十人十色の人生がある。どの人も同じ人生などない事も教わった。その折にその都度触れながら自分自身もどんどん鍛えられ変わっていく。そうそうの杜にいて本当に色々な事を教えられた。20代そこらの右も左も分からない私をここまで育ててくれた事、とてもありがたく感謝している。勿論まだまだ未熟であるのだが。生きていく事とは何だろうという事を共に考え私を成長させてくれた場所。それが私にとってのそうそうの杜である。

私も40も過ぎこれからもまだまだ自分を成長させてもらいたいと感じながら、同時におこがましいが少しでも何か恩返しが出来たら思う今日この頃である。きっとまだまだ成長させてもらう事が恩返しなのだろう。最後に、ここまで続けられているのはきっとこの仕事が楽しいからなのだ。これからも楽しんで行きたい。



## 想創奏 20 周年記念号

地域生活支援センター あ・うん 林 直輝

法人設立 20 周年を迎えることになりました。私が入職 15 年目で、法人化してからの 3/4 の期間をそうそうの杜で過ごしてきたことになります。何を書こうかと昔のことを思い返していると、入職間もない頃に「自閉症って知ってる？」と尋ねられた時に「自分の殻に閉じこもってる人、引きこもりの人みたいな感じですか？」と答えていたことを思い出し、懐かしく感じています。知識も経験も全くないままに働きだしたのですが、知的障害のある人たちとの関わりはとても新鮮で、楽しく（でも時に腹立たしく）、あっという間に歳月が過ぎていき今に至っています。

その間、利用者もスタッフも色々な人と出会ってきました。その中でも心に深く残っているのは親のいない、あるいは親との関わりが途切れてしまった中高生たちとの出会いです。彼らの置かれた状況や育ってきた過程を耳にすると過酷なものも多く、世間的に「普通」や「当たり前」と言われることがどれだけ恵まれているのかと改めて感じさせられました。彼らと初めて出会う時に荒川理事長はよく「信頼できる大人はいる？」と聞くのですが、大抵は「いない」と答えます。この返事だけでも胸が痛むのですが、私が担当していた高校生の男の子と話をしている時に、至って自然な感じで「ねえ林さん、友情とか信頼っていうけど、それってほんまにあるの？TVとか映画の中だけの話じゃないの？」と質問を投げかけられたことがあります。一瞬思考が止まり、

質問の意味を理解するのに時間を要しました。どう説明したものか…と思った後で自分なりに思う所を話したような気がしているのですが、その問い掛けに対しての衝撃が大きく、何と答えたかはよく覚えていません。問題の根深さと自身の力不足を嫌というほど突きつけられた出来事でした。

他にも児童養護施設を出るために高校に進学しなかった子、周りのあらゆることが怖いから自分を強く見せようとする子、今際の際にある母に勇気を振り絞って面会に行ったら拒絶の言葉を投げつけられた子、色々いました。でも多分、そうってしまった責任は本人よりも親であったり、それまで出会ってきた大人たちの方が圧倒的に大きいのだろうと感じています。中にはそうそうの杜との関わりを断ってしまう子もいましたが、出て行った後でもたまに「元気？」「〇〇さんまだいてる？」と言った調子で連絡をくれることもありました。彼らにとってそうそうの杜がフラッと立ち寄れる場所であり、私たちが他の大人とはちょっと違のかな？と感じてもらえるような大人であればと思います。

彼らとの出会いをピックアップしましたが、他にも色々心に残る出来事がありました。東日本大震災のボランティアであったり、富士登山でご来光を見たことであったり、実地指導前の泊まり込みであったり、悲しい別れであったり、挙げればキリがありません。これらを楽しいとか、悲しいと感じるのは変わらない毎日を重ねてきたから



であり、本当に大切なのは、その変わらない毎日であるということを感じながら日々を生きています。そして入職前は自分でも気づいていなかったのですが、「自分は人のことがこんなに好きだったんだ」ということに気付かせてもらえたことには感謝でいっぱいです。

入職間もない頃に出会った彼らは出会った当時の私の年齢になっています。大人と子どもではなく、利用者と支援者でもなく、

年の離れた兄弟でもなく、友人ともちょっと違う関係性をどういえばいいのか分かりませんが、これからも彼らの人生にちょっとだけお邪魔させ続けてもらおうと思っています。そして信頼や友情、愛情といったものがどういうものなのか、彼らの言葉や行動、生き様で私に教えて欲しいと密かに期待しています。

### 創立 20 周年にあたって思う事 地域生活支援センターあ・うん：大竹 寛輝

法人設立 20 周年という事で、一度立ち止まり、今までの自分を振り返りながらそうそうの杜への想いなど書かせていただきます。乱筆乱文で読みにくい部分があるかと思いますがお付き合いください。

自己紹介ですが、自分は地域生活支援センターあ・うんという事業所で相談支援業務を行っています。制度的な話をすると難しいので、簡単に言えば障害がある人の「暮らし」「仕事」「将来の事」など、生きていく上で必要な事への相談、調整、見学同行等行っています。介護保険で言うところ「ケアマネジャー」を想像してもらうとイメージが付きやすいかと思います。

自分はそうそうの杜に入職して約 10 年になります。入職後に一番印象に残っていることはやはり、平成 23 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」です。その年に大学を卒業して新社会人として不安と期待の中、「日本はどうなるのだろう？」と感じていたことを今でもよく覚えています。

その流れというわけではありませんが、そうそうの杜でも「ゆめ風基金」を通して結果的に平成 23 年～平成 28 年まで約 6 年間ボランティア派遣を行いました。

震災直後は調査活動や直接支援が多かったのですが、しばらくして現地で出会った人たちと繋がり、現地で地元の人達を中心となった事業所ができるまでの軌跡を見ることができました。(奏海の杜)

自分は派遣第一弾で 4 月 15 日～4 月 27 日の約 2 週間、宮城県の女川町という町でボランティア活動させてもらいました。震災直後という事もあり、今だに当時の風景を思い出すと、どう言葉にして説明したらいいのか迷います。しかし、この経験は自分にとって何物にも代えがたい経験になったと感じています。

この派遣を始めに、今までに様々なことを経験させてもらいました。異動もあり、今までに 5 か所の事業所に配属しました。

日々の中身はそれぞれの事業所で違いますが、一貫していることは法人の理念でもある「そうそうの杜は、すべての人がその人らしく生き生きと暮らせる地域と社会を創っていきます」ということではないかと感じます。

逐一理念を考えながら利用者と接しているという事はないが、僕ら含め、暮らしているのは地域であり、その地域の中で自分がどう生きていきたいか？どうしたいか？と当たり前の事を真剣に考えていくだけだと思います。

また、ふと普段の生活や行事の際にスタッフと利用者が楽しく笑いあっている場面を見ると、「この楽しい場面をずっと続けていきたいだけだ。」と、気づかされる時があります。

今までに色んな人と出会い、時には悲しい別れも経験してきました。どうにもなら

ないこともあるし、時代や制度に振り回されることもあります。今では新型コロナウイルスによって生活への制限も強いられている状況です。

世界情勢を見ても個人（自国）の利益を優先するような動きも多く、人のありようが少しずつ変わってきているようにも感じます。「遅い」よりは「早く」、「不便」よりは「便利」という様に人も物も比べられる世の中だと感じる。

果たして本当にそれでいいのだろうか？「遅い」「不便」の中にも「必要な事」はたくさんあるし「悪い事」ではないと感じる。最後に抽象的な表現になってしまいましたが、時代や人に流されず、目の前のにいる人や自分に対して「必要な事」ができる存在でありたいし、そういう仲間をそうそうの杜で作っていく事ができればと感じます。

## 創立 20 周年を振り返って

地域生活支援センターあ・うん 井上 愛子

私が福祉に関心を持つようになったのは、ダウン症のクラスメイトとの出会いである。小学校一年生の時、クラスにダウン症の生徒がいた。先生は入学式の時にみんなの前で『みんなと同じように出来ないこともあるが、みんなと同じクラスメイトの一人』であるということを話した。教科によって違う教室で授業を受ける以外は、みんなと同じように休憩時間に遊んだり、放課後は家へ行ったりして過ごした。怒られる時も先生はみんなと同じように注意をしていた。

しかし、高学年になると『消えろ』『死ね』という言葉を使う生徒も一部いたが、ほとんどの生徒が今までと変わりなく関わり続けていた。私の中でも、それが特別なことではなく、普通のことだという感覚だった。

この経験から福祉関係の大学へ進学し、もともと子どもが好きだということもあり障害児の入所施設へ定期的にボランティアに行っていた。

しかし、そこは非現実的であった。入所施設を否定している訳ではないのだが、家族が会いにも来ない、他の兄弟には存在す

ら隠されている等、あまりにも私が経験してきたものとはかけ離れており、閉ざされた別世界にいるような感覚だった。

そこで、もっと地域と関わることが出来る福祉というものはないか？と考えていた時にそうそうの杜で『児童デイサービス』を始めるということを大学の先生から教えてもらい伝の見学に行った。当初は児童デイサービスが数少なく、知名度も低いものであった。

その後、継続的にボランティアに行かせてもらうことになる。言葉でのやりとりが難しい子もいたが、遊びの中でおもちゃを手渡してくれた時に、その子の中で私の存在が見えた瞬間だと思えば嬉しい気持ちになれた。

ボランティアの時は、その場を一緒に楽しく過ごすことしか見えていなかったが、スタッフの立場になると、その子のもっと先を見据え、療育ということも踏まえて考えだすと『これでいいのか？』と悩むこと

も増えた。でもその時に、支えてくれたのも子ども達である。些細なことだが、私が外からフロアに戻った時に子どもたちから「おかえり」「待っていたよ」と言ってくれたことで、私を必要としてくれている、居場所があるという暖かい気持ちになれたし、その一言で、もう一度向き合っ前を向いて頑張ってみようという気持ちになれた。

その子の行動や言葉のもつ意味を理解しようとするのが難しく、正解はわからないが楽しい。それは、本人との関わりだけではなく、保護者とも関わりがあり、色々と話していく中で私も保護者から障害のことだけではなく、子育ての大変さや楽しさをたくさん教えてもらった。

そうそうの杜は私が求めていた地域で過ごすことを実現できる場所である。これからも私もその地域の一員として関わって行きたいと思う。

## 20周年を迎えるにあたって

六田 莉紗

創奏やつむぎ館を見学したとき、環境的には古くて狭い家でしたが戸を開けるとそこで作業をしていた利用者さん皆から明るい挨拶がたくさん出てきて驚いたことが印象的に今でも残っています。

私が入社した時は、地域生活をすすめているところで、すでにグループホームはありましたが、制度にはない形での少人数の利用者さんたち共同で生活する下宿屋を立ち上げていくところでした。

色々な理由でショートステイに来る利用者さんの中で家族との生活が難しい方やグループホームで生活している方の中などから下宿屋や一人暮らしへうつり、利用者さんたちの関係性等も含め、一人一人に合う生活に向けて、毎年利用者さんの引越しがありました。

しかし、ステップアップする事を目指して下宿屋を経て一人暮らしをされてもそれが続けていくと合わないということもあり、

一人一人合った形は様々で、いろんな形態での生活が選択できたら、その人にあったものが見つかればそれがいいことなのだと考えるようになりました。

今ではその下宿屋で共同生活されている利用者さん、一人で暮らす利用者さんも増えました。何年か前には落ち着きなく過ごしていた利用者さんが、今落ち着いて過ごしている姿や普段の笑顔を見ていると私も安心し嬉しく感じます。

グループホームから一人暮らしへ本人が希望して引っ越しをされた利用者さんで、私が担当になるとそれまでは普通にしゃべってくれていたのに急に話しかけてもほとんど何も返事してくれなくなったことがありました。

どうすればいいかわからず、用件だけ紙に書いて伝えたりしていましたが、本人が希望する青色の携帯電話を一緒に買いに行った後から、また普通に話してくれるようになりました。利用者さんと一緒に何かする、利用者さんの思っていることを実現させる。私は、最初は自分が何をやっているのかよくわからないまま指示されたことをしていただけでしたが、どんな小さなことで

あっても一人一人の利用者さんの生活につながっていることがわかりました。それをしていくことが生活だと思いますし、当たり前のことなのだと思います。

でも、自分で何か訴える事が苦手、難しい利用者さんに対して、少ない訴えやサインをどのように受け取っていくかいつも難しいと感じます。また、こちらの視野によって利用者さんの生活も広がる事もあれば狭めてしまう事もある危険も感じます。そのような訴えやサインをちゃんと受け止めて、ちゃんと理解行動していたら結果は違っていたのではと考えることがずっと頭にあります。それをもとに利用者さんとの関わりは大事にしていきたい、丁寧にしていきたいと思っています。

私が働いている間にも、そうそうの杜はいろんな事業が増え、古い建物も変わり、雰囲気も少し変わったようにも思いますが、全部障害のある人たち、利用者さんが地域で生活することがもとにあり、つながっていることなのだと考えます。私自身は変わらず、これからも利用者さんとの関わりを大事にしていきたいと思っています



## 【寄稿】

そうそうの杜創立 20 周年おめでとうございます

岡崎 伸さん

大阪市立総合医療センター 小児神経内科副部長

仲秋の候、皆様におかれましてはますますご繁栄のことと心からお喜び申し上げます。御手紙を頂き、そうそうの杜様が創立 20 周年記念を知りました。仕事で記念事業には伺えないことから、僭越ながら一筆啓上させていただきます。

まずは、大変おめでとうございます。10 年以上にわたり毎号機関誌を拝読させて頂いており、皆様の活動は存じ上げており、素晴らしいと思っています。

そうそうの杜様との直接的な出会いはおそらく 2009 年前後頃だったと思います。当時「でん」が蒲生四丁目にあり、私が主治医をしているお子さんが利用させて頂いてました。その子は重度の知的障害と、運動障害がおありでしたが、てんかん発作があるのと、膝立ちでは動けたりして移動が多いこと、また興奮が周期的にあって叫んでしまう子さんで、まだ幼児期でもあることから、当時受け入れてくれたのは「でん」の他にありませんでした。

私は小児科・小児神経内科・てんかんと 3 つの専門医を取得し、専門医療の追求を求めて我武者羅に勤務していましたが、ちょうどその頃、喜谷昌代様という英国難病支援の慈善団体の責任者の方に出会い、難病児ボランティアの道へといざなわれました。医療関係者、教育関係者、そしてご家族と共

に元気にあそびのボランティアを行いました。運営が課題でした。当時難病児ボランティアの相談に乗ってくれる方はいない中、「でん」でお世話になったご家族が「荒川様なら相談にのってください」と言いはじめ、すると荒川様はすぐに有力な方々を集めて下さりました。熱い思いで語り合った“時”が私と荒川様の絆です。

10 年後にはコロナ禍がおとずれ、ボランティア活動の一つの発展型として、てんかんの家族のために nanacara というスマートフォンアプリの監修を行いました。その相談にも荒川様はのって下さり、その縁で 2020 年、2021 年と、てんかんの講義をさせて頂く機会を得ました。皆様と、一緒にこどもや家族の課題を考えられたこととても嬉しく思っています。その時に、荒川様と周囲を散歩して、重度身障の方が自立して生活できる新しい施設を見学させて頂きました。道中、地域の方々と荒川様が溶け込んでおられるのを感じ、20 年間歩んでこられた地域に根差した活動がますます深まっておられることを知りました。

私も 50 歳をこえ、そろそろ“時”が止まって欲しいと思う日々ですが、無情な事に“時”は本当に早く過ぎていき、そして時代は次々と動いていくと思います。わたしが専門医をできるのはあと 10 年程度ですが、そ

うその杜様の活動は、次の20年またその次の20年と続いていかれることと思います。必要とされる方は次々と出てくると思いますし、うその杜様でない安心して過ごせない子どもたち、うその杜様でない安心して預けられない家族がいると思います。どうぞよろしくお願いいたします。

一筆啓上と言いながら、長くなってしまいました。

みなさま全員のご多幸とご健勝をお祈りしております。

(追伸：うその杜特性クッキーの甘さと風味に、妻>私がファンです)

### これまでも、これからも うその杜 アドバイザー 関 宏之さん

ちかごろ髪に白いものが交じる荒川さんですが、刻まれた年輪のうち、うその杜の起業を思い立つずっと以前の出会いが忘れられません。当時の私は、嶋野の隣駅にある法人のリハビリテーション部門の長だった。

いかにも風体を気にしない下駄ばきの彼に会ったのは長居のスポーツセンターだったと記憶しています。若い彼は、数名の利用者の人たちを率いて楽しげな会話を交わしながら帰る途中でした。私は朴訥な彼に一目で惚れ、一緒に仕事をしないかとリクルートに及んだのです。粗末な部屋しか提供できなかったが、私が住んでいた埃っぽいゴミダメのような部屋よりは数段上だった。確たる保障もない中で、気軽に応じてくれた。弱々しかった集団に、有言実行を唱える彼の加入によりどっしりとした基盤ができた。あれから40年近くが経ちました。

荒川さんともう一人の気の合った職員、私の3人は、お昼の休憩時間も勤務が終わった夕刻にも卓球に興じ、いい汗をかいて駅前の一杯飲み屋でいつ終わるともない議

論に明け暮れたものです。歩行訓練士養成講習会では、横浜からの参加者とわが弟と彼の異色の三羽ガラスが闊歩していたのを思い出します。私は、自分の限界を感じてその法人を去りましたが、彼は新たな施設建設に尽力して、請われてさる法人に移りました。

私は、就労支援の現場でいい人たちと、いいスタッフと時代に恵まれて最高の季節を過ごしました。その後、広島の大学に転出しました。

そんな折、荒川さんから連絡があり、社会福祉法人を立ち上げるから協力して欲しいという要請があり、「ほんまかいな！」と思いながらも嬉しくもあり、設立当初の理事に加えてもらいました。あれからまだ20年しかたっていないのですね。

折に触れて夢を語り、実践を積み重ねる実行力に目を見張り、ぶれない彼の生き方に共感を覚えてきました。何ととっても、かのリハビリテーションセンターの卒業生や指導員の鑑である藤原先生に随伴している姿は「ほんまもん」だと感嘆し、広島での教え子も職員に加えてもらいました。

かの卓球仲間の彼もわが弟も若くして逝ってしまったのですが、その折の彼の丁寧な対応や温かい心根は、哀しみを和ませてくれました。

東北の大震災に際してはスタッフとともに駆けつけ、コロナ禍に苦しんでいる法人にも出向いた。なんやかんやに関わりとにかく信頼を裏切らない、腰の軽い荒川さんや職員集団なのです。

舞い戻った法人で喜寿を迎え、任期満了により退職しました。その時に貴重だと思って集めた書籍やヒノキ造りの机を彼に押し付けました。快く引き取ってくれ、しかも、心優しい彼は、晴耕雨読と決め込んでいた私に「老いてはいかん」と職員研修やサービス管理者の研修、予想外の企画にも関わるよう仕向けられる。それがまた嬉しい。

20年という節目を素晴らしい職員集団とともに、地域を耕しながら、地域に育てられながら事業展開をされている。そうそうの杜の図鑑、ホームページでみる稲田や地域の中学生たちとの交流、東南アジアの若者たちの研修受け入れ、街を歩いていて挨拶を交わす職員や商店街や通行人の方々、そんな光景を「いいな！」と思います。

今、月に一回程度訪れては職員の方々と個別支援計画などについて話をする機会に恵まれています。原理主義者の私は何だかんだと難癖をつけている。そのうちにもう来るな！といわれそうだ。

この間、そうそうの杜の利用者の方と福祉従事者としてあるべき姿について踏み込

んだ話をした。そこで「みんな違ってみんないい」「寛容であることです」という答えが返ってきた。ぐうの音も出なかった。もちろん、そうそうの杜に対する論評もあった。何気ない一言で傷つくこともある。倫理綱領の議論には、当事者の人も加わるべきだと思う。そうそうの杜が掲げる「コンプライアンス」は、役職者や身内の上下関係、支援者・理解者だけで溶解していいものではありません。ステークホルダー（利害関係者）という大きな枠組みにおいて果たすべき約束事のはずです。

しかし、そんなことまでしたら身が持ちません、という声も聞こえてきそう。確かにそうですが、若いころに当時の理事長からいわれた諫言があります。「カニは自分の甲羅にあわせて穴を掘る・・・君はどうか自分なりの穴は掘れるようになったがそれだけだ、深みや広がりがない」というものでした。また、比類なきもの（アズナンバーワン；as number One）として有頂天になるな、畏れを知れ！とも戒められました。

20周年はおめでたく、関係者の一人として心よりお祝いを申し上げます。

そして、さらに、ここまでスケールの大きくなった法人において、他人任せにして大切なものを見過ごさないように、地域でじっくりと練られ、深められ、高められている交わりを大切にしながら「まだしなアカンことがあるんや！」と踏み出す勇気と矜持と反省をもちつつ殻を破り続けて欲しいのです。



## 「社会福祉法人そうそうの杜」成人おめでとうございます！

日比野 清さん

(社福) 日本ライトハウス常務理事・元 (社福) そうそうの杜理事

思い起こせば、そうそうの杜が産声を上げたのは、1995 (平成 7) 年のことだったように思います。それは、ちょうど私が社会福祉法人日本ライトハウスを退職した年と一緒でした。

長年、そうそうの杜理事長荒川輝男氏とともに働いてきた日本ライトハウスをほぼ時期を同じくして退職し、それぞれ異なった道に進みました。

特に、ライトハウスでの最後の大きな仕事として、当時の視覚障害者のための各種の施設や事業を集大成して視覚障害リハビリテーションセンターの建築計画をした際には、私の目の代わりになり、夜中に図面を書いてもらったことなど、結構猛烈に仕事をしていたことも、今は懐かしく思い出されます。

荒川氏は知り合った時から重複障害者問題、とりわけ知的障害を伴う障害者に関心を持ち、さらには施設型福祉ではなく、地域に根ざした福祉の展開を目指していました。そういった意味では、無認可ながら創業を開始したそうそうの杜の誕生は彼の信念でもあったわけです。

そして、次の転機となったのは、2000 年 (平成 12 年) のことだったと記憶しています。私は当初から、そうそうの杜の理事をさせていただいていましたが、強く強調したのが、この時期でした。すなわち、社会福祉法の見

直しによって社会福祉法人の設立要件が緩和されたことでした。

当時も形式にあまりこだわらない荒川氏でありましたが、私は社会福祉法人化を強く勧めました。それは、将来の組織としての信用と信頼、行政機関からの補助金交付をはじめとする各種の優遇を考えたからでした。それらも認められ、新しい出発として 2000 年に社会福祉法人そうそうの杜が誕生しました。

以来、障害者と地域を忘れずに社会福祉に新風を巻き起こしてきたように感じています。次々と新しい事業を展開し、数カ所の自社建物を立て、地域、特に大阪市城東区内になくはない事業を展開する社会福祉法人になったと思います。

勿論、時代の風を味方にし、地域に溶け込んでいく社会福祉事業ではなく、地域とともに歩む社会福祉事業のあり方を作ってきたと言っても過言ではありません。

昨今の社会福祉を考えても、障害者の完全参加と平等のために各種の福祉サービスが施行されています。しかし、それらが本当に健常者と障害者がともに地域で歩んでいく支援に繋がっているのでしょうか？私の勝手な独り言ですが、今の福祉サービスは障害者個々人のために施行されているというよりは、事業者のためにサービスが施行されているように感じます。また、セルフケアマネのできる障害者にとっては自己主張を

達成するための道具になっているようにさえ感じてなりません。本当にサービスの必要な障害者にとって、その人が地域で生活していくための真の支援に役立っているのかとさえ感じてしまいます。

これらの矛盾を障害者自身が気づき、健全者も障害者も分け隔てなくともに暮らす社会を構築していくために、どうしても避けては通れない関所になっています。このことを私に感じさせてくれたのも 20 数年にわたるそうそうの杜の事業展開であったと思います。

かつては「障害者は地域にとっては厄介者！」というようなレッテルを貼られてし

まっていました。それを「障害者がいてくれたからこそ、あるいはここに社会福祉法人や施設があったからこそ…」と言われるようにしていかなければならないと、社会福祉事業の対象者の逆転の思想とも言うべき考えを、社会福祉を担う人たちにも気づかせてくれたと嬉しく思っています。

それを証明してもらうためにも、今後もそうそうの杜の初心と理念・方向性を貫いて欲しいと願っています。更なる社会福祉法人そうそうの杜のご発展とご多幸を祈念しています。

松藤 栄治さん

大阪市福祉局地域福祉課

法人創立 20 周年おめでとうございます。

私とそうそうの杜とのお付き合いは、平成 9 年に私が新採で城東区役所の知的障がい者福祉担当に配属された時からになりますので、かれこれ 24 年程になります。平成 9 年当時、そうそうの杜はまだ社会福祉法人ではなく、小規模作業所「創奏」の運営を始めてから 2 年目ぐらいの頃で、私がはじめて創奏にお邪魔したときは、利用者も数えるぐらいでした。それが、見る見るうちに利用者が増えていき、2 か所目の「座座」もできて、さらに社会福祉法人の認可を受けて…という法人の黎明期に、私は城東区で一緒に仕事をさせていただいたことになります。

創奏に行くと、いつも「松藤さんが来たよー」と利用者やスタッフの皆さんに暖かく歓迎していただけるので、大した用事がな

くてもよくお邪魔していましたね。利用者の支援に関して、吉見さんと激しく議論したことも懐かしく思い出されます。

その後、私が城東区から他の部署に異動してからもお付き合いは現在まで続き、荒川さんに障がい者ケアマネジメント研修の講師をお願いしたり、最近では新型コロナのために自宅等で生活できなくなった方を緊急的に受け入れていただく等、そうそうの杜の皆さんには困りごとが生じた時に、いつも力になって助けていただいています。また、仕事を離れたところでも、海水浴に同行させていただいたり、機関誌に駄文を掲載していただく等、交流を続けていただいています。

そうそうの杜に関して、私が昔からいつも思うことは、障がい者福祉の業界を見渡

して、「似たような団体が他にないな」ということです。障がい者福祉に関する事業を行っている団体には、設立母体の違い等から大きく分けて、①障がい当事者団体系、②親の会・家族会系、③大きな施設等を運営する社会福祉法人系、④主に在宅系サービスを行っているNPOや株式会社等の小規模事業者系、という4つのタイプがあると私は常々考えているのですが、そうそうの杜はこれらのいずれのタイプとも違うと思います。

障がい当事者や親御さんが作った団体ではないので、①②と似ていないのはもちろんですが、支援者が作った組織ということで③大手社福法人に似ているかという、そうでもなく、むしろ既存の社会福祉法人へのアンチテーゼというか、違う道を行くことが、そうそうの杜の基本方針になっているのではないかと、思ったりします。では、最後の④NPO等の小規模な事業者に似ているのかということとそれも違い、まだ小さな作業所だった時代から、支援者としての自己規定の強さというか意識の高さ（うまく表現できていませんが…）に関しては、他の団体とは全く違う水準にあると感じていました。そういう訳で、そうそうの杜は私の中では20年以上、上記の分類に当てはまらない、障がい者福祉の世界におけるオンリーワンの存在であり続けています。

そうそうの杜に対して私が抱く印象は、明るく開放的で頼りがいのある法人、というイメージですが、皆さんはいかがでしょうか。このイメージを構成しているものをもう少し詳しく分析してみると、それは、常に新しいことを学び吸収しようとする旺盛な知的好奇心と、様々な課題に対して果敢

にチャレンジしていく積極性と、自分たちは支援者であるということに対する非常に強いこだわり（自負と責任感）、この3つのファクターの絶妙な配合の結果だと思われます。これらの特徴は、そうそうの杜のトップである荒川さん個人の特徴、個性でもあり、リーダーの美質が法人の全体に浸透しているということで、リーダーシップの在り方として日頃より深く敬服するところでもあります。

また、荒川さんがよく口にされる「施設を持たない社会福祉法人」という点についても、そうそうの杜が、これからの時代の社会福祉法人の在り方を考えるための、モデルの1つになりうることを示唆していると思います。施設を運営している社福法人は、概してその施設の敷地内で実践が完結してしまう傾向があると感じますが、そうそうの杜にはそういう目に見える枠がないこともあって、地域の中で実践の根を伸ばし続けています。

少子高齢化等により今後ますます維持・存続が危ぶまれる地域コミュニティを、今後どのようにして支えていくのかという、日本社会が直面している喫緊の課題に対して、社会福祉法人が果たすべき役割は何かについて考えるにあたり、そうそうの杜が鳴野エリアを中心に展開している様々な実践が、そのヒントを与えてくれると思います。

社会福祉実践を通じた地域コミュニティ活性の実践例は、地方の田舎町を舞台にしたものは若干ありますが、都市部におけるものは非常に珍しく、ぜひ研究者の方に研究・紹介してほしいものです。

そして、そうそうの杜の地域に根差した

様々な取り組みは、障がい者福祉の最大のテーマである、この社会を「障がいのある人とない人が地域で一緒に暮らすまち」に変えていく手法を考えるための、ヒントや具体的なイメージを我々に与えてくれるものであると思います。重い障がいのある人たちと、彼ら彼女らに接することに慣れてない地域の人たちが、同じ地域で交流しながら暮らすことができるようになるということは、考えれば考えるほど本当に大変なことです。

嶋野の街角では今、地域の方々と障がいの重い利用者・スタッフとが交わる光景が日常的に見られるようになっていますが、そうそうの杜の実践を参考にして、大阪市内の他の地域でも同様の光景が見られるようになってほしいと強く思います。

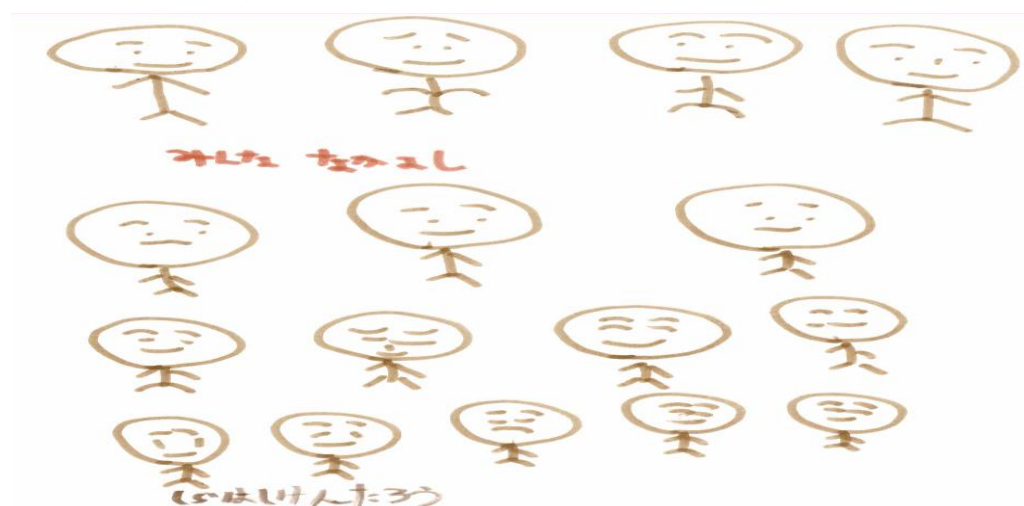
さて、法人創立から 20 年を経て次の 10 年 20 年に向けて、そうそうの杜はこれからどのように歩いていくのでしょうか。創業者であり指導者である荒川さんも、そう遠くない未来には勇退されると思います。そうなった時に、そうそうの杜はどうなるのだろうか、ということは非常に気になることであり、おそらく皆さんも同じ気持ち

と思います。

社会福祉の政策・制度は、これから本格的な人口減少の時代を迎え、さらに大きく変わっていくことでしょう。時代の変化に応じて法人の在り方も変わっていくことが必要なのは間違いありませんが、そうであっても、型にはまらない「そうそうの杜っぽさ」だけは無くさないでいただきたいと、これからのそうそうの杜を担うスタッフの皆さんにお願いしておきます。普通の社会福祉法人みたいな話は、そうそうの杜からは聞きたくない、というのが、そうそうの杜ファンの皆さんの一致した願いだと思います。

私がそうそうの杜と出会った 20 数年前、小っぱな作業所にすぎなかった「創奏」が、20 年後にこのように発展していることを、当時だれが想像できたでしょうか。

そうそうの杜のこの 20 年間の歩みは、非常によくできた奇跡物語のように思われます（映画化が必要ではないでしょうか?）。次の 20 年においても、そうそうの杜の皆さんが、我々の期待のさらに上に行く活躍をしていることを期待しております。



## 【ご協力いただきありがとうございます】

社会福祉法人そうそうの杜では、当法人の理念や事業、目的に賛同される方、事業活動へのご支援をいただける方に寄付をお願いしています。寄付をしていただいた皆様には機関紙「想創奏」をお送りします。

寄付金について、従来は、当法人の理念や事業、目的や事業活動にご支援をいただいた方々に賛助会費と一般寄付という形で寄付をいただいておりますが、賛助会は実質的な活動を伴っていなかったため廃止させていただきました。

そのために皆様のご厚志は一般寄付という形で統一させていただくことにしました。

寄付の方法は、以下の郵便振替口座にて御振込いただきますようお願いいたします。今後ともご支援、ご協力いただきますように、法人として努力して参りますのでよろしくお願いいたします。



ゆうちょ銀行

口座番号：00940-5-185986

振込先（加入名）：社会福祉法人 そうそうの杜



一般寄付（2021年1月26日～2021年9月13日にご支援頂いた方）

安部 篤/荒川 輝男/飯田 靖子/池田 勉/伊藤 光子/稲岡 了三/今井 力

上出 昭子/川内田 和昭/国本 光子/倉川 俊介/倉川 晴子/河坂 昌利

貞方 恵子/佐藤 友子/關 宏之/高見 浩子/竹林 秀規/田中 多佳子/永島 健一

中島 伸治/西田 信子/野間 満典/橋本喜義・千鶴子・暁子/兵藤 多美子/福本 昌彦

藤井 智恵美/三宅 克英/村津 和雄/森 貴宏/横川 よし子/吉川 愛子

一般社団法人 Teeth One 代表理事 野本綾子/鯉の会

（敬称略）

その他、地域の方々にアルミ缶・牛乳パック・おもちゃ、古本、中古家具等、様々な物品のご寄付を頂いておりますことを、心より感謝申し上げます。いつも本当にありがとうございます！！





**法人本部**

・大阪市城東区鳴野東3-2-26      Tel : 06-6965-7171   Fax/06-6167-2622

**地域生活支援センターあ・うん 相談支援事業**

・城東区鳴野東3-2-28      Tel/06-6969-8123   Fax/06-6167-2622

**北部地域センター（大阪市障がい者就業・生活支援センター）**

・城東区鳴野東3-2-28      Tel/06-6955-9921   Fax/06-6167-2622

**とことこっと 居宅介護・重度訪問介護・同行援護・移動支援・訪問介護**

・城東区中央1-6-28      Tel/06-6167-7530   Fax/06-6955-8826

**庵 生活介護**

・城東区中央1-6-23      Tel/06-6935-0909

**げんげん 生活介護**

・城東区鳴野東3-18-5      Tel/06-6180-9670

**伝 児童発達支援・放課後等デイサービス**

・城東区鳴野東3-2-26      Tel/06-6955-8070

**創奏 生活介護**

・城東区鳴野東3-3-1      Tel/06-6923-8929

**Kawasemi 就労継続支援A型**

・城東区中央1-6-29      Tel/06-6935-1111   Fax/06-6935-1911

**杜のShokudo 就労継続支援B型**

・城東区鳴野東3-2-26      Tel/06-6955-8080   Fax/06-6167-2622

**座座 就労継続支援B型**

・城東区鳴野東3-2-12      Tel/06-4258-6013

**つむぎ館 就労継続支援B型**

・城東区鳴野東3-2-26      Tel/06-6180-6820

**今福事業所 就労移行支援・就労継続支援B型**

・城東区今福南1-2-24      Tel/06-6933-0737

**いま福の家 共生型（生活介護・地域密着型通所介護）**

・城東区今福南 4-15-33      Tel/06-6180-7399

**添 短期入所**

・城東区鳴野東3-2-5      Tel/06-6167-5395

**Lianの杜 杜のざっかやさん 就労継続支援A・B型**

・城東区鳴野東3-2-1